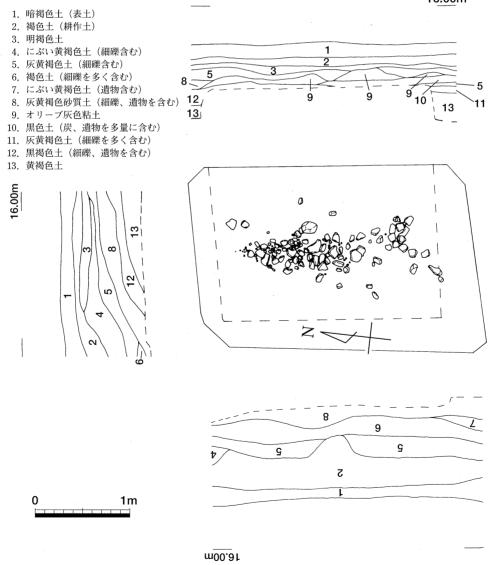
吉備系土師質土器椀である。36・37には、外面に指押えの痕跡がある。38の底部は、高台が高く、断面はにぶい三角形を呈しているので、形状から13世紀初頭のものと思われる。39~41は土師質土器の杯、42~46は、土師質土器の皿である。47は、瓦質土器の火鉢である。48~50は、備前系須恵質土器である。48は椀の口縁部で、端部に重ね焼きの痕跡が見られる。49は壺の口縁部で、端部上面には狭い水平部を有し、丸みをもたせている。外面にロクロ目が見られる。これらは、間壁編年備前Ⅱ期のものと思われる。

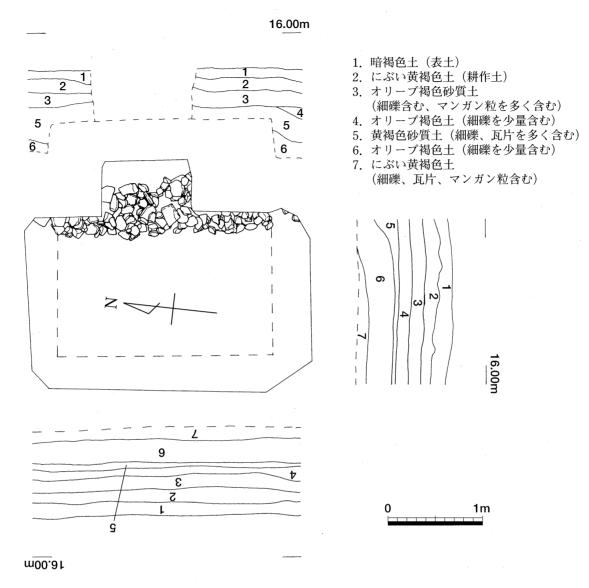
排水施設が検出された08トレンチ周辺の状況をあわせて説明しておく。

07トレンチの瓦だまりは、礫を多く含んで非常に硬く締まり、その上面が粘土で覆われていた(第32図)。また、09トレンチの瓦だまりは、約50cmの幅で南北方向に列状をなして続くものと思われた(第33図)。これらは、排水施設と何らかの関わりがあると考えられるが、その関係を特定することはできなかった。

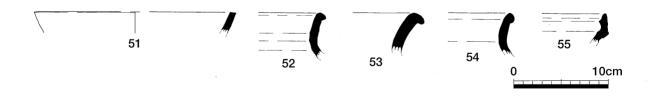
第34図の51~53は09トレンチ、54・55は06トレンチから出土したものである。排水施設周辺のトレンチからは、07トレンチを含めてこれらの備前系須恵質土器や備前焼のほかに、瓦質・土師質土器の鍋・釜・椀・皿や古墳時代の須恵器、瀬戸焼などが出土している。



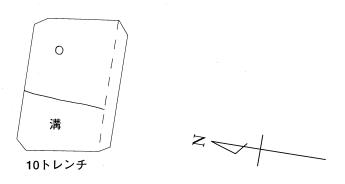
第32図 07トレンチ(1/40)

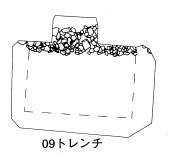


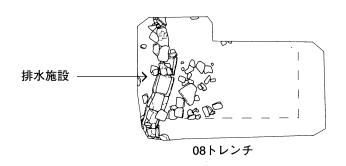
第33図 09トレンチ (1/40)

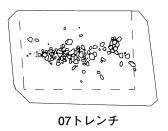


第34図 排水施設周辺出土遺物 (1/4) (51~53:09トレンチ,54・55:06トレンチ)









0 1m 2m

第35図 排水施設周辺遺構配置図(1/80)

(7) 土器窯 (第28・36図)

土器窯は、礎石建物の南西に隣接して2基検出された。両窯の平面検出時は、両窯の焚口付近を中心に、ほぼ窯の全面を土師質土器片や炭を多く含む土で覆われていた。平面検出をした後に、それぞれの窯を主軸に沿って断ち割り、ともに北東側を掘り下げた。東側の穴窯をSO-3、西側のダルマ窯をSO-4とした。

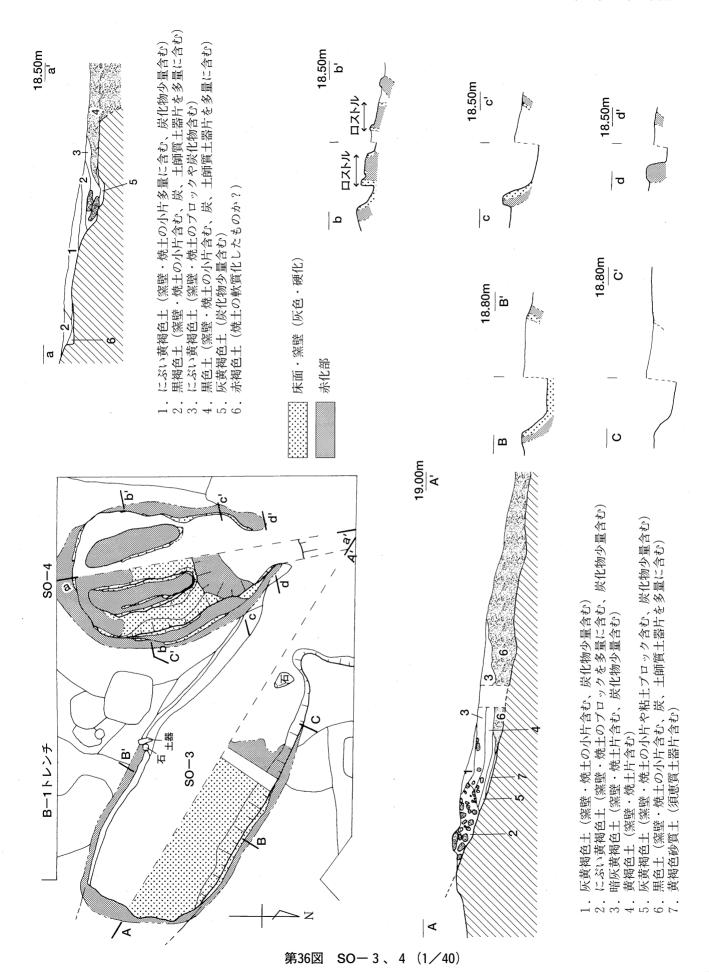
穴窯(SO-3)は、幅約1.3m、把握できた全長は約3.3mで、山側(南東)に延びると思われるが、後世の削平により破壊されていた。主軸方向は東西で、東西から約30°南に振り、北西に開口している。窯壁は、焼成部が灰色硬化しているが、焚口部と思われる所はあまり焼けておらず、焼成部との境は被熱により赤化している。焚口部から焼成部へは傾斜して緩やかに立ち上がり、床は舟底形を呈している。

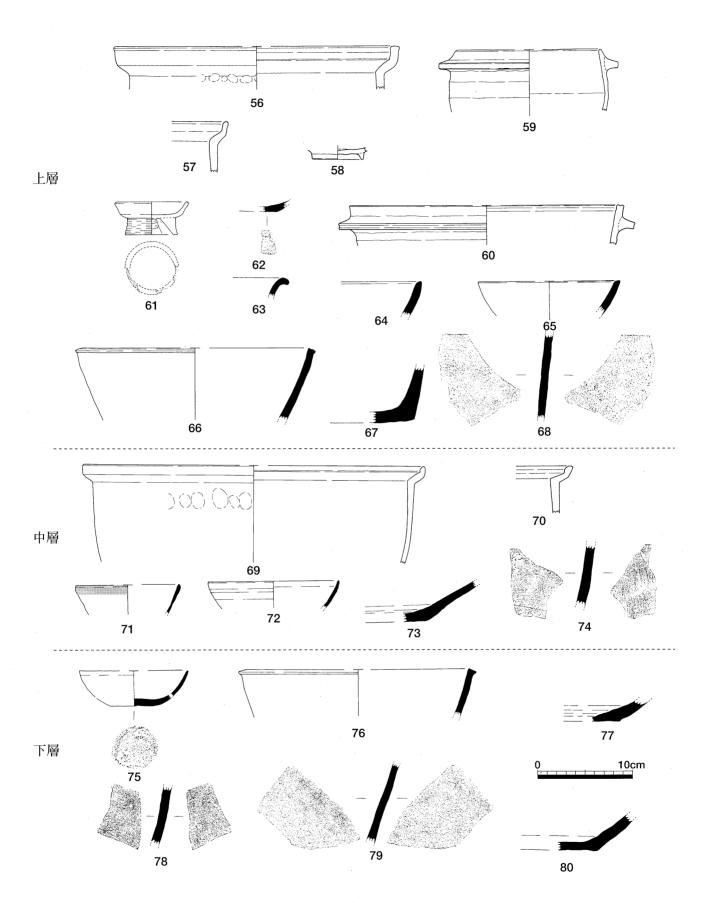
窯体内の埋土は、炭や窯壁片を含み、備前系須恵質土器や瓦質・土師質土器が出土した。下層になるにしたがって備前系須恵質土器の量が多くなり、中・下層からは焼き過ぎて硬質化した鍋の破片も出土している。上層については、隣接するダルマ窯の灰原の遺物と思われる、瓦質・土師質土器片が多く出土している。56~68が上層、69~74が中層、75~80が下層から出土したものである(第37図)。 56・57は、畿内系瓦質・土師質土器鍋の口縁部で、段をもって形成されている。58は、吉備系土師質土器椀の底部で、高台は高く、断面はにぶい三角形を呈している。59は、畿内系土師質土器釜の口縁部である。61は瓦質土器の高台付皿で、仏具の一形態と思われる。「ハ」字状の高台で、外面の調整は丁寧である。62は備前系須恵質土器皿の底部で、回転糸切り痕跡があり、焼成はややあまい。63は備前系須恵質土器壺、64~66は備前系須恵質土器鉢で、間壁編年備前Ⅱ期のものと思われる。69・70は畿内系瓦質・土師質土器鍋の口縁部であり、段をもって形成されている。70は、須恵質のように非常に焼きが良く、失敗作ではないかと考えられる。71は備前系須恵質土器椀の口縁部で、端部に重ね焼きの痕跡があり、焼成はややあまい。72は備前系須恵質土器椀の口縁部であるが、71に比べて砂粒を多く含み、焼きは良い。73は、備前系須恵質土器鉢の底部である。75は備前系須恵質土器棒で、72と同様に砂粒を多く含み、焼きは良い。76・77は備前系須恵質土器鉢であり、78~80は備前系須恵質土器甕である。

瓦質・土師質土器は、鍋や釜が多く、杯・皿なども出土している。ほとんどのものが畿内系の形態である(註2)。また、上層から高台のしっかりした吉備系土師質土器椀が出土しているが、これは搬入品が紛れ込んだものと思われる(註3)。

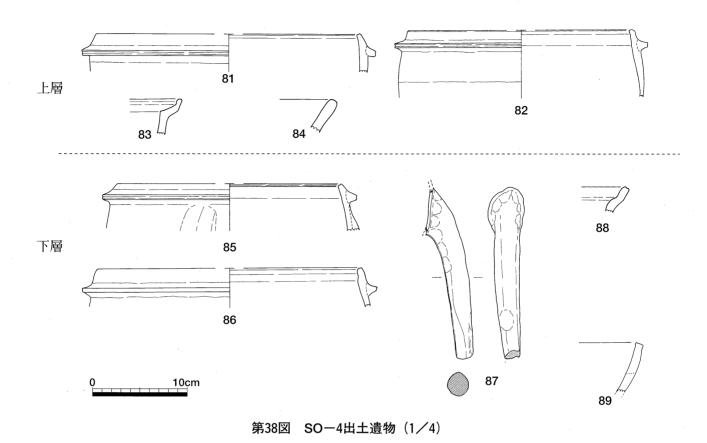
備前系須恵質土器は、鉢、甕、皿、椀、壺とほぼ器種は揃っているが、鉢、甕、皿(椀)の破片が多い。椀・皿は焼きが非常にあまいものが多いが、中には砂粒を多く含んで焼きの良いものもある。これらの須恵質土器片は、全体的に間壁編年備前Ⅱ期に類似したものが多いようである。これらのことから、この窯では、備前Ⅲ期に類似した備前系須恵質土器を焼成したものと思われる。また、隣接する窯の灰原からの混入とも考えられなくもないが、鍋などの失敗作も多数出土していることから、瓦質・土師質土器の形態のものも焼成していた可能性が考えられる。

ダルマ窯(SO-4)は、幅約1.5m、長さ約2.4m、焚口幅約0.3mの楕円形で、主軸方向はほぼ南北方向である。窯壁は、被熱して赤化しているが、一部の焼成室分 焰床付近は灰色硬化している。 焚口は、すぼまって北西に開口する。焚口部と焼成室との間には約20cmの段差があり、焼成部はほぼ平坦で2本の分 焰床を持つ。この窯は、分 焰床や壁面の状態から、一度改修されているようである。





第37図 SO-3出土遺物(1/4)



また、隣接した穴窯を意識して主軸をずらして造られていることから、穴窯との同時操業も考えられる。 窯体内の埋土は、赤色焼土のブロックや炭を多く含み、瓦質・土師質土器片が出土した。器種は、 鍋や釜がほとんどであるが、鉢や皿も出土している。ほとんどが畿内系のものである。ほかに、高台 の低い吉備系土師質土器椀(小破片のため未図示)や、備前系須恵質土器片も数点出土している。81 ~84が上層、85~89が下層から出土したものである(第38図)。

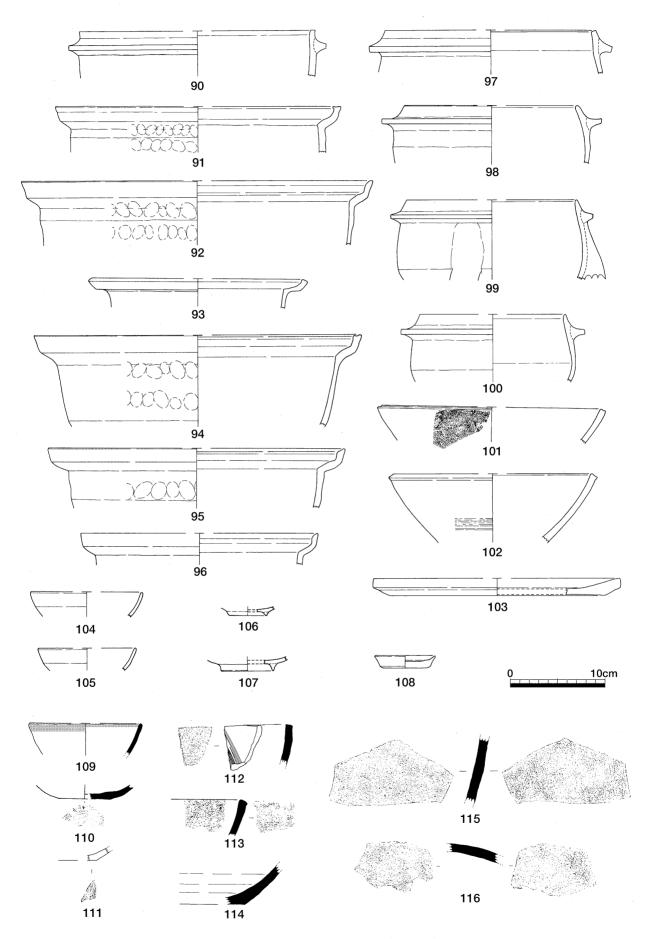
81・82は、畿内系土師質土器釜の口縁部である。83は畿内系瓦質土器の口縁部で、段をもって形成される。須恵質土器のように非常に焼きが良く、失敗作ではないかと考えられる。84は、瓦質土器鉢の口縁部と思われる。85・86は畿内系土師質土器釜の口縁部であり、85は鍔に接して脚部が付けられている。88は畿内系土師質土器鍋の口縁部で、段をもって形成される。89は、土師質土器鉢の口縁部である。

備前系須恵質土器は穴窯のもの、吉備系土師質土器椀は搬入品が紛れ込んだものと思われる。土師質土器皿については点数は少ないが、吉備系土師質土器椀や備前系須恵質土器より多く出土しており、焼成していたとも考えられなくもない。少なくともこの窯は、瓦質・土師質土器の鍋・釜を焼成した窯と考えられる。

なお、窯の覆屋に付随すると思われるピットも検出しているが、調査範囲が狭いことや平面検出の みにとどめていることから、その詳細は不明である。

灰原からも多数の遺物が出土している(第39図)。

90・97~100は畿内系の瓦質・土師質土器釜である。99は、鍔に接して脚部がつけられている。91



第39図 土器窯灰原出土遺物(1/4)

第4章 発掘調査 第2節 B区の調査

~96は、畿内系の瓦質・土師質土器鍋である。口縁部は段をもって形成され、外面には指押えの痕跡が見られるものが多い。101・102は、瓦質・土師質土器の鉢である。103は、土師質土器の焙烙である。104~107は、吉備系土師質土器椀である。106はやや低い高台で、断面はにぶい三角形を呈する。107は高台が高く、断面はにぶい三角形を呈する。108・111は土師質土器皿であり、111の底部は回転糸切り痕跡がある。109・110は備前系須恵質土器椀で、109の口縁端部には重ね焼きの痕跡があり、110の底部には回転糸切り痕跡がある。112は、備前系須恵質土器のすり鉢である。口縁上端はほぼ平坦で、やや外側下方に傾斜する。内面には極細の櫛状工具によるカキメがあり、グイビが谷窯のものより古いと思われる(註4)。113・114は備前系須恵質土器の鉢で、間壁編年備前Ⅲ期のものと思われる。115・116は備前系須恵質土器甕の体部で、一部にハケメの痕跡が残る。

瓦質・土師質土器が圧倒的に多く、鍋や釜を主体とするが、鉢、皿(椀)も出土している。畿内系のものがほとんどである。ほかに搬入品とみられる吉備系土師質土器椀もあり、高台の高いものから低いものまで出土している。また、備前系須恵質土器も瓦質・土師質土器ほどではないが、鉢、甕(壺)、椀(皿)などが多数出土している。この灰原は、隣接する掘立柱建物の遺構面の一部を覆っており、瓦列には切られている。

土器窯で焼成されたと思われる備前系須恵質土器、瓦質・土師質土器は、胎土に多くの砂粒を含んでいる。これは、万富産東大寺瓦の胎土と類似しており、同様の粘土を使って焼成されたものと考えられる。

(8) 掘立柱建物 (第28・41・43図)

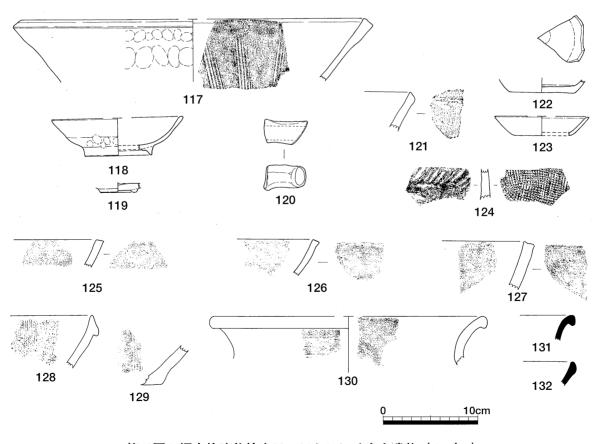
掘立柱建物は、平成14年度調査で礎石建物の規模を確認するために設定した、03、04トレンチにおいて検出された区画溝とピット群で構成される。

区画溝は、礎石建物の西側を壊して、ほぼ平行に掘られている。その北側では、ほぼ直角に西に曲がり、約5m西側に延びた所で瓦列に切られている。15トレンチの東側でも南北方向に溝が検出され、これらが同一の溝であるならば、東西方向約8m、南北方向約12mの長方形の区画溝となる。

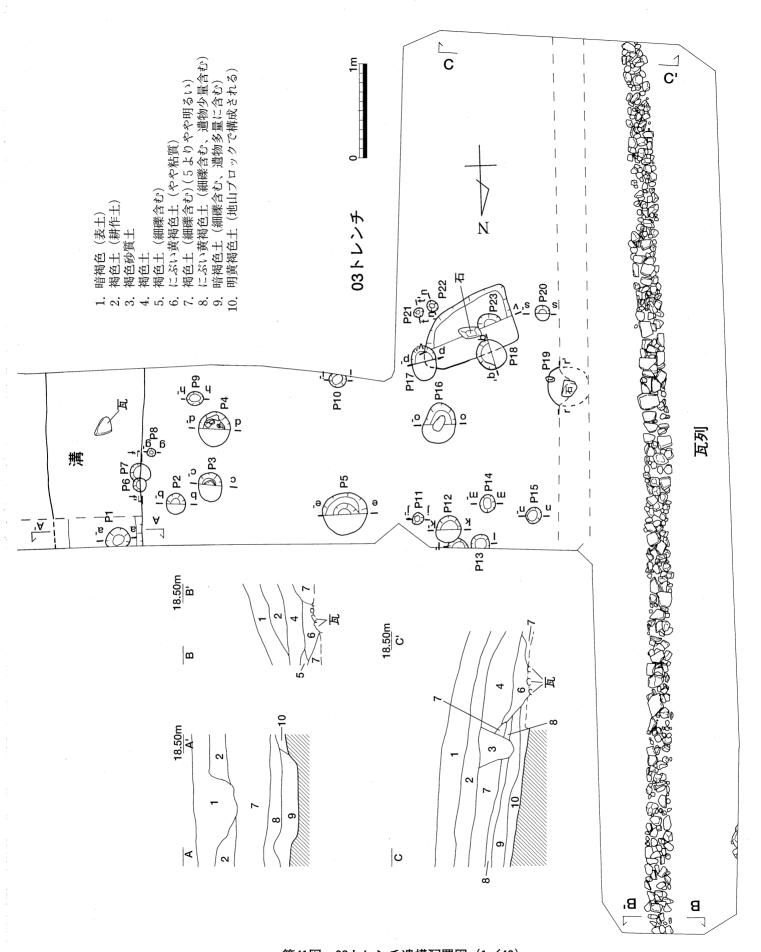
区画溝に取り囲まれた中では、多数のピットと土壙1基が検出された。ピットは、大きなものは半掘し、小さなものは全掘した。深さは、10cmほどの浅いものがほとんどであった。P3は、東大寺瓦片を礎盤として利用していた。P4は、土鍋などの土師質土器片で柱を固定していたようである。ピットの並びから何棟かの建物が重複していると思われるが、掘立柱建物の棟数や規模を特定することはできなかった。また、礎石建物に伴うピットも存在する可能性がある。

第40図は、区画溝やピットなどを検出するまでに出土した遺物の主なものである。ほかに瀬戸焼の 破片も出土している。

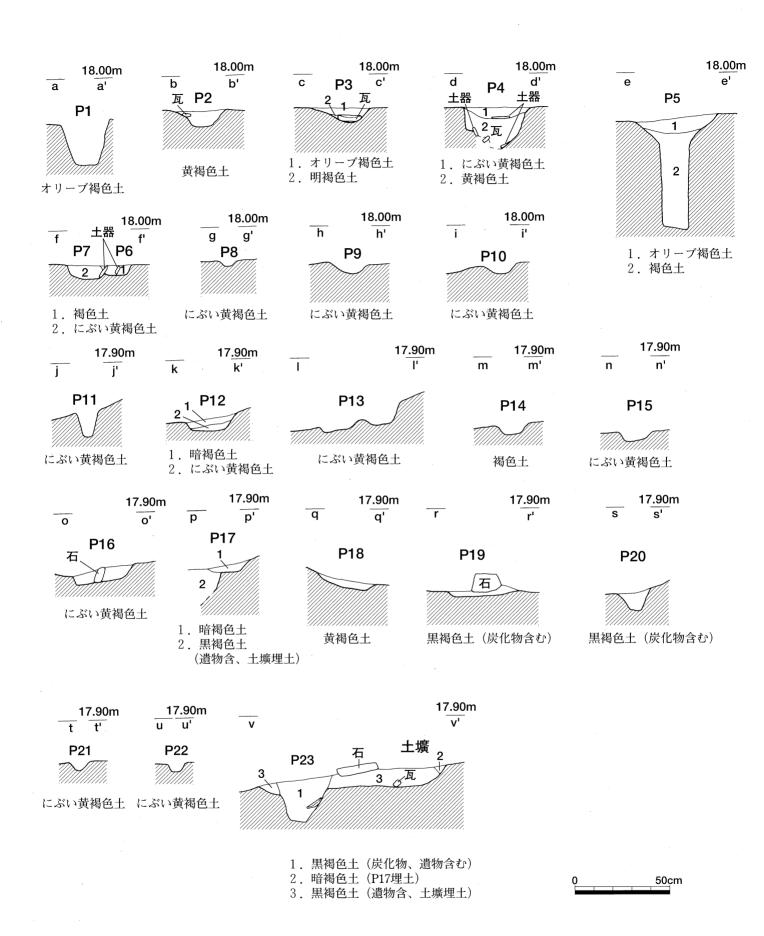
117は、瓦質土器のすり鉢である。内面に 4 条のカキメが施されている。118・119は、吉備系土師質土器椀である。118は高台が高く、断面はにぶい三角形を呈する。119は高台が低く、断面は台形を呈し、やや粗雑な形態である。120は、土師質土器の「行平」形鍋の把手である。121は土師質土器鉢の口縁部で、口縁上端に 5 条の沈線、内面にハケメの痕跡がある。122・123は、口禿の白磁皿である。13世紀中葉から14世紀前半のものと思われる。124は古墳時代の須恵器甕の体部である。外面に格子目叩き、内面に当て具の痕跡が見られる。125~127は備前系須恵質土器鉢、130は備前系須



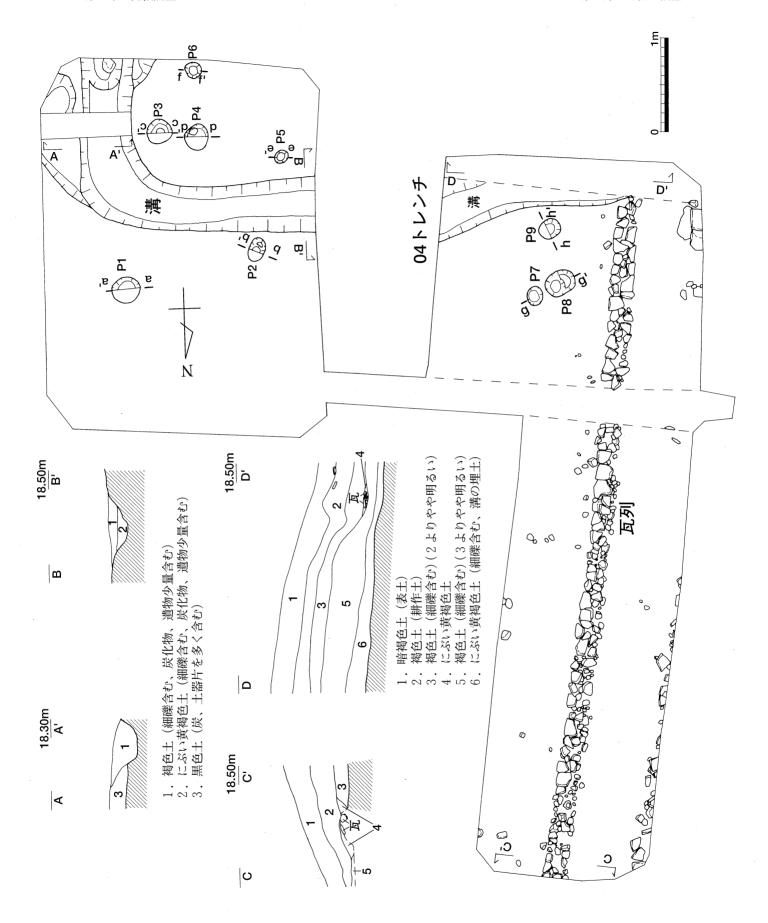
第40図 掘立柱建物検出03・04トレンチ出土遺物(1/4)



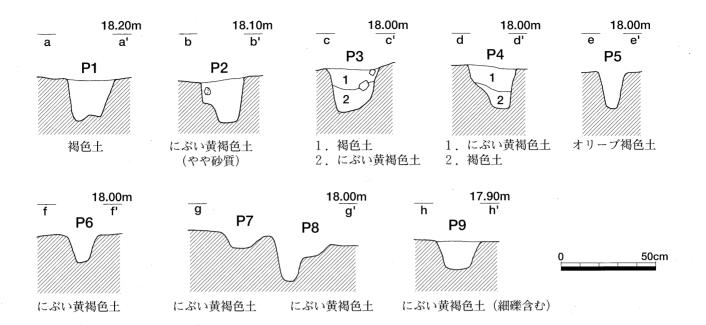
第41図 03トレンチ遺構配置図 (1/40)



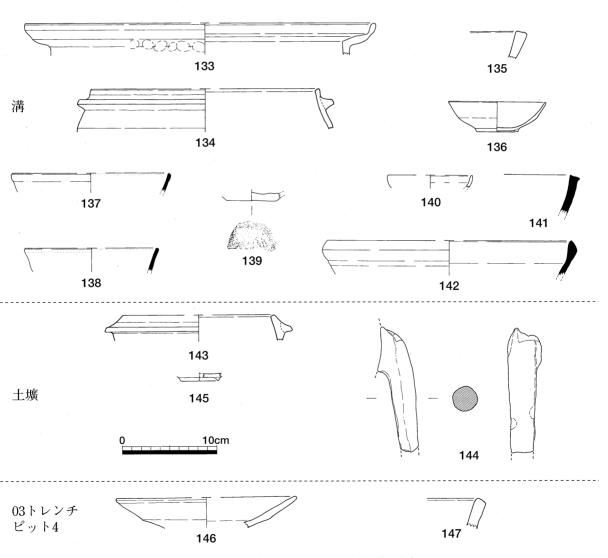
第42図 03トレンチピット(1/20)



第43図 04トレンチ遺構配置図 (1/40)



第44図 04トレンチピット (1/20)



第45図 溝・土壙・ピット出土遺物 (1/4)

第4章 発掘調査 第2節 B区の調査

恵質土器甕の口縁部である。間壁編年備前Ⅱ期のものと思われる。128·129は備前焼のすり鉢、131は備前焼甕である。132は、東播系須恵質土器鉢の口縁部である。

区画溝内から、高台の低い吉備系土師質土器椀(第45図136)が出土し、ピット検出面からも13~14世紀代の白磁片(第40図122・123)が出土している。北東部の溝の屈曲部では溝(SD-1)を切っているが、03トレンチでは掘立柱建物の遺構面上層で土師質土器片を多量に含む炭層(土器窯 $SO-3\cdot4$ の灰原に付随すると考えている土層)があり、時期の特定が難しい。この区画溝は、少なくとも14世紀代には埋没したものと考えられる。

(9) 瓦列(第28・41・43図)

瓦列は、03、04トレンチの西側で検出された。規模を確定するために調査トレンチを南北方向に拡張したが、約20m確認しただけで、さらに南北方向に続いている。今後の調査で、規模を確定する必要がある。この瓦列は、先に述べた掘立柱建物を区画する溝を切っており、それより新しいことがわかる。また、この溝と重なる付近で、東方向の山側にやや曲がっている。瓦列は、10㎝前後の大きさの「東大寺瓦」片と小礫を用いて幅約30㎝、厚さ約5㎝に敷き並べている。当初は、建物の地覆石として利用されたものと考えたが、瓦列内に礎石もなく、長さが20m以上になることから、何らかの区画のために構築されたものと思われる。また、暗渠や雨落ち溝とも考えられるが、断面の観察結果からは、そのようには思われなかった。

瓦列を検出した面からは、瓦質・土師質土器、備前系須恵質土器、備前焼、青磁などが出土している (第46図)。

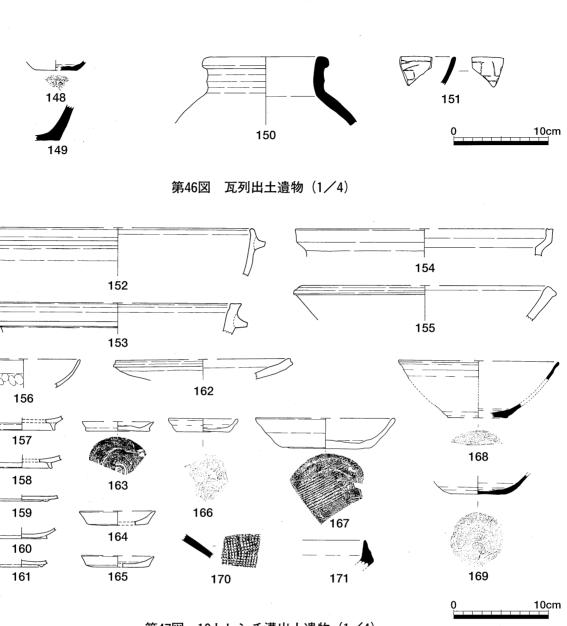
148・149は、備前系須恵質土器の椀と甕の破片である。150は備前焼甕の口縁部で、玉縁を呈し、間壁編年備前Ⅲ期のものと思われる。151は青磁雷文帯碗の口縁部で、15世紀代のものと思われる。 瓦列の時期の特定は難しいが、14世紀前半には遡らず、15世紀代までのものと考えられる。

(10) その他の遺構

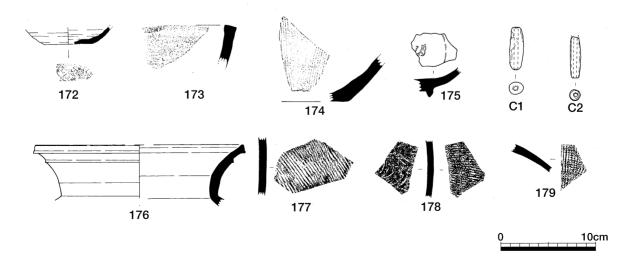
10トレンチは、深さ約2mまで掘り下げ、東側にピット1個、西側に溝1条が検出された。溝内には炭を多く含む黒色土が堆積し、多量の瓦質・土師質土器片が含まれていた。

152~154は、畿内系瓦質土器の釜・鍋である。155・162は、瓦質土器の鉢である。156~161は吉備系土師質土器椀であり、高台の高いものから低いものまで出土している。163~166は土師質土器皿で、163には回転へラ切り痕跡、166には回転糸切り痕跡がある。167は土師質土器杯で、底部を回転へラ切りしたのちに、板目痕跡が付着している。168・169は備前系須恵質土器椀で、いずれも底部に回転糸切り痕跡がある。170は古墳時代の須恵器甕、171は備前焼のすり鉢である。

瓦質・土師質土器の器種には、鍋や釜などが多く、土器窯($SO-3\cdot 4$)の灰原や礎石建物の北側を切っている溝(SD-1)から出土した、瓦質・土師質土器と同様のものであった。ほかに白磁や瀬戸焼が出土している。



第47図 10トレンチ溝出土遺物 (1/4)



第48図 B区その他の出土遺物 (1/4)

第4章 発掘調査

註

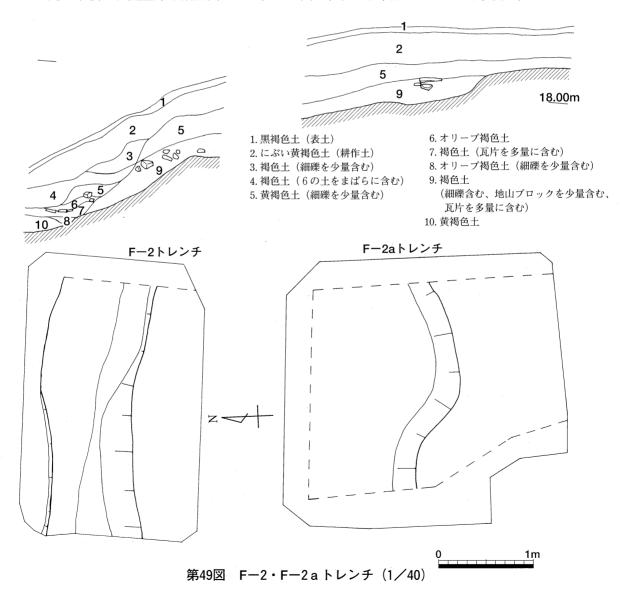
- 1 今回の調査で出土している鍋や釜は、瓦質であるものと土師質であるものがあるが、畿内系の鍋や釜は、本来は瓦質土器として生産したものと思われ、少なくとも畿内系の三足付釜については、瓦質土器であると、鈴木康之氏にご教示いただいた。
- 2 福田正継氏、伊藤晃氏のご指摘による。
- 3 胎土分析により吉備系土師質土器椀は、複数の所から持ち込まれたものと推定される。白石純氏のご指摘による。
- 4 伊藤晃氏のご指摘による。

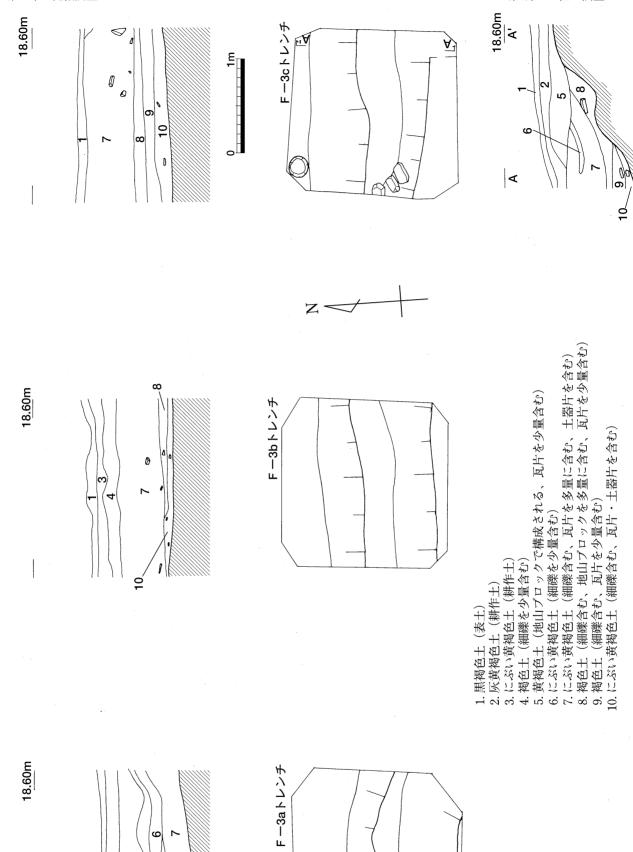
第3節 F区の調査

F区は、上の山地区北部に位置する。太田住宅地造成時に多くの「東大寺瓦」が出土しており、軒瓦片も採集されていることから、東大寺瓦窯が存在する可能性が大きい。また、「楠田権平本」にある南窯と推定される場所でもある(第6章参照)。しかし、科学探査の結果は思わしくなく(註1)、発掘調査でもそれを裏付けるように、窯などの遺構は検出されなかった。だだ、公園に隣接した北端部では、「東大寺瓦」片が多く出土している。

F区は、平成13・14年度調査で大小18本のトレンチを設定して調査した。トレンチ番号の頭には、いずれもFのアルファベットがつく。ここは、開発計画が浮上している場所であるため、窯の有無を確認する必要があった。「東大寺瓦」片が多数出土したのは、F-2、2a、3a、3b、3cトレンチである。

F-2トレンチは、表土中からも多くの「東大寺瓦」片が出土したが、特に最下層では折り重なるように瓦が堆積し、窯壁片も数点出土した。この出土状況は、製品にならない瓦を廃棄したように思

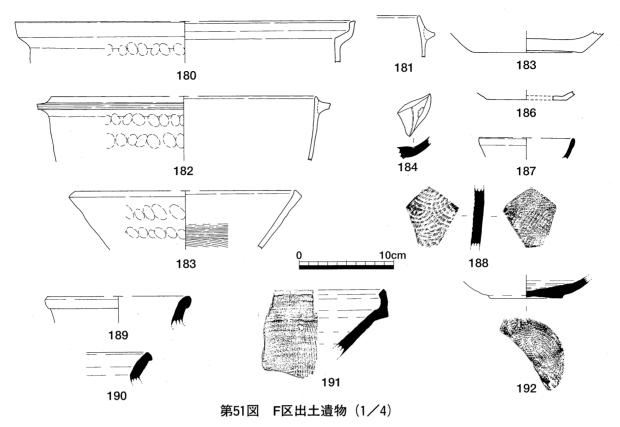




第50図 F-3a・F-3b・F-3cトレンチ (1/40)

4

2



われた。このため、窯の有無を確認しようと1 m南にF-2aトレンチを設定したが、多数の瓦が出土するのみで、窯体を発見することはできなかった。

F-3a、3b、3cの各トレンチは、中間層で多量の瓦が出土したが、炭をあまり含んでいないため、2次堆積したものと思われる。各トレンチ内には、東西方向に走る犬走りのようなものが検出されたが、よくわからない。この調査によって、F-3トレンチの山側上段に窯があると考えられたため、F-4トレンチを設定して調査した。しかし、遺構や遺物は何も確認されなかった。

また、F-1トレンチから西側の調査では、これまでの土質と様子が違い、遺構は何も確認されず、出土した遺物も少量であった。

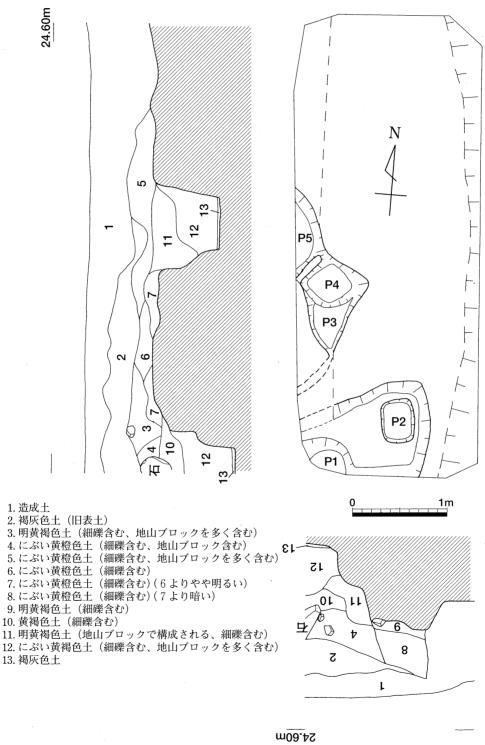
多量の「東大寺瓦」が出土した上の山地区北端部は、瓦窯が存在していたと考えられるが、太田住宅地造成時に破壊された可能性がある。ただし、今回の調査のトレンチは範囲が狭く、遺構を検出できなかったとも考えられ、上の山地区北端は慎重に対処していかなければならない場所である。

瓦以外の遺物については、瓦質・土師質土器の鍋・釜、須恵質土器や備前焼などが出土している。瓦質・土師質土器の鍋・釜は、大寺山地区から出土のものと形態が類似している(180~183、185)。須恵質土器は、間壁編年備前Ⅲ期に類するものや東播系鉢の破片も見られた。備前焼は、間壁編年Ⅲ~Ⅴ期のものがあった。また、龍泉窯の青磁碗(184)、瀬戸焼(187)、古墳時代の須恵器(188)も出土している。

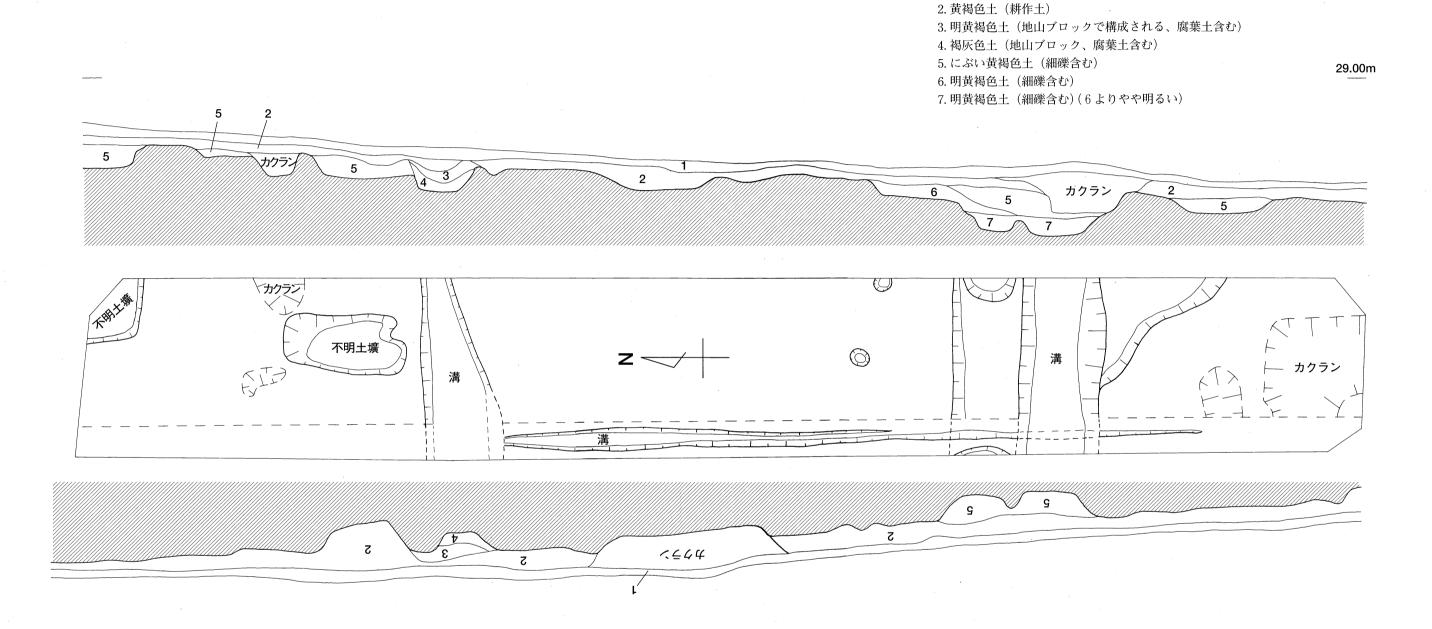
註 1 今回の科学探査では、窯体の存在を特定できなかった(第 3 章参照)。平成 8 年に実施した北端部の探査では、窯体と考えられる磁気異常が 4 か所で確認されている。しかし、探査場所を明確に示す資料が町教育委員会には残されていなかった。略図から推定して、平成13年度にトレンチ(F-2、3)を設定したが、窯は検出されなかった。今後、範囲を拡大して調査する必要があると考えられる。

第4節 C区の調査

C区は、平成13年度に5本のトレンチを設定して調査した。トレンチ番号の頭には、いずれもCのアルファベットがつく。現地には桃が植えられており、植樹に伴う撹乱が目立ったところである。科学探査で指摘のあった土壙は、深い撹乱であった。



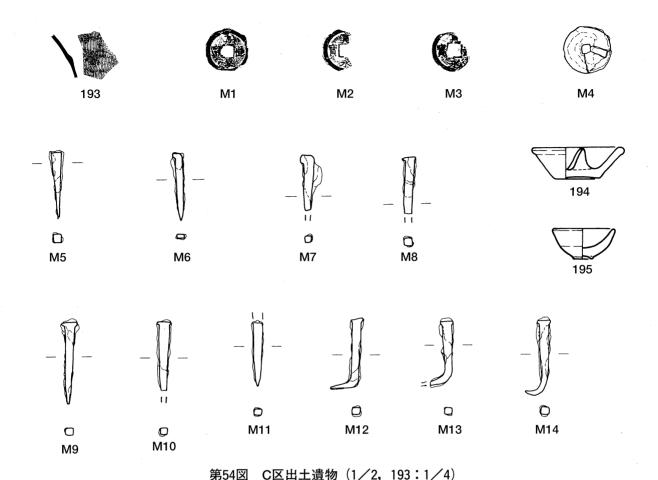
第52図 C-1aトレンチ (1/40)



1. 黒褐色土(表土)

第53図 C-4トレンチ(1/40)

m00.es



この調査区は、「大寺山」項部平坦面にあたり、東大寺瓦窯操業時の施設があるものと想定された。しかし、C-1aトレンチとC-4トレンチからは、近世の遺構や時期不明のものが検出された

C-1aトレンチは、近年に造られた備前焼窯南側に隣接する。この窯を構築する際に造成されており、造成時には何も出土しなかったと聞いている。

このトレンチでは、ピットが 5 個検出された。ピットはいずれも隅丸方形で、P3 とP4 の切り合いはP3 が古い。P1 は炭化物を多く含み、図示したM5 を含む釘 2 点が出土した。P2 は上部での直径が36cmで、中心に 1 辺12cmの隅丸方形の痕跡があった。痕跡内からは、図示したM6 $\sim M8$ を含む釘 7 点、銅銭の寛永通寶($M1\sim M3$)と鉄銭 2 点(D1 点はD4 が出土した。D4 からは、完形の土器 D4 点(D4 、D5 と、図示したD4 のD4 を含む釘 D4 数点が出土した。D4 は欠明 皿で、D4 はミニチュア品の台付小椀である。釘は長さが約D4 のので、頭部形状が折り曲がったものや潰れて「D4 大になっているものがあり、中には先がカスガイ状に折れ曲がっているものもあった。断面はいずれも方形である。この遺構は、釘で止められた木製の箱に、火葬骨を納めたものと考えられる。

C-4トレンチは、東西方向に 2 条の幅約40cmの溝、南北方向に 1 条の幅約10cmの溝がそれぞれ走り、ピット数個や土壙が検出された。ただし、遺物はほとんどなく、これらの遺構の時期は不明である。

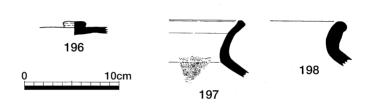
なお、C-2トレンチから東大寺瓦(平瓦)が2点出土している。

にとどまった。

第5節 D区の調査

D区は、平成14年度に調査した区間である。調査トレンチは、01、02、11、12、13、14、16、17、18、19の10本である。いずれも遺構は検出されず、遺物も少量出土したのみであった。この周辺は谷部にあたり、水が湧き出てくることから、多くのトレンチが地山面まで検出できずに途中で断念した。また、水が比較的少ないところでは、2m以上掘削しても地山面に到達しないため、調査途中で断念している。このようなことから、この区域は、中世以後に谷であった所が造成されたと考えられる。現在は畑として利用されているが、近代の暗渠があることから、かつては水田として利用されていたようである。調査中には、旧水田面やその床土と思われる堆積土を確認した。

遺物は、土師質土器の釜・ 鍋の破片、古墳時代や古代の 須恵器、197などの備前系須 恵質土器、198などの備前焼 などが出土している。



第55図 D区出土遺物(1/4)

第6節 E区の調査

E区は、大寺山地区南端部に位置し、県報告のA区の窯の南側にあたる。調査トレンチは、20トレンチのみである。多くの東大寺瓦片を利用した、近代の暗渠が検出されただけであった。ただ、「戦後に土地の持ち主が、瓦を窯詰めしている状態の窯を発見して、瓦の完形品を取り出した」「山側斜面に瓦がたくさん見えていた」という伝聞がある場所でもある。昭和54年の窯が多数確認された県調査地の南側に位置することから、以後さらなる調査をする必要がある場所である。

第7節 瓦

今回の調査で出土した「東大寺瓦」については、遺構別に列記するべきであるが、発見された瓦窯が1基で焚口部のみであり、瓦窯に隣接した瓦だまりの遺物も、多くをB-2トレンチ包含層遺物として取り上げている。また、遺構に伴って出土した瓦には、軒瓦などはないため、本報告では特徴的で残りのよい「東大寺瓦」を、まとめて報告することにした。

今回の調査で、瓦はコンテナ約85箱分出土している。平瓦や丸瓦がほとんどであるが、軒瓦や塼、引掛け瓦などの特殊な瓦も出土している。また、多数の「東大寺」刻印瓦が発見された。瓦の胎土中には、砂粒を多く含んでおり、このことが万富産瓦の特徴の一つと思われる。

1. 軒瓦

軒瓦は、岡山県調査報告書(註1:以下、県報告という。)では1点も出土していないが、これまで所蔵されている軒瓦について調査し、軒丸瓦を2類6種(1類4種、2類2種)に分けている。その後、山崎信二氏が岡山県内出土瓦と東大寺の所用瓦とを比較検討している(註2)。軒丸瓦は1類7種、2類2種、軒平瓦は3種を確認し、さらに軒丸瓦と軒平瓦の文字を囲む個々の円が半球状に盛り上がっている点に着目して、平らなものをⅠ群、半球状に盛り上がるものをⅡ群とし、Ⅰ群、Ⅱ群に分けている。また、芦田淳一氏は、軒平瓦について3型式11種類ほど確認し、技法について細かく検討している(註3)。

軒丸瓦の文様は、中央に円環をめぐらせた梵字を置き、その外側に「東大寺大仏殿」の銘文を1字ずつ円環に入れて配し、その外側に蓮華文と珠文を巡らしている。軒丸瓦の1類は、花弁端が尖り隣の花弁と重なり合うもの、2類は花弁端が反転した形で凹み、隣の花弁と接触しないものである。

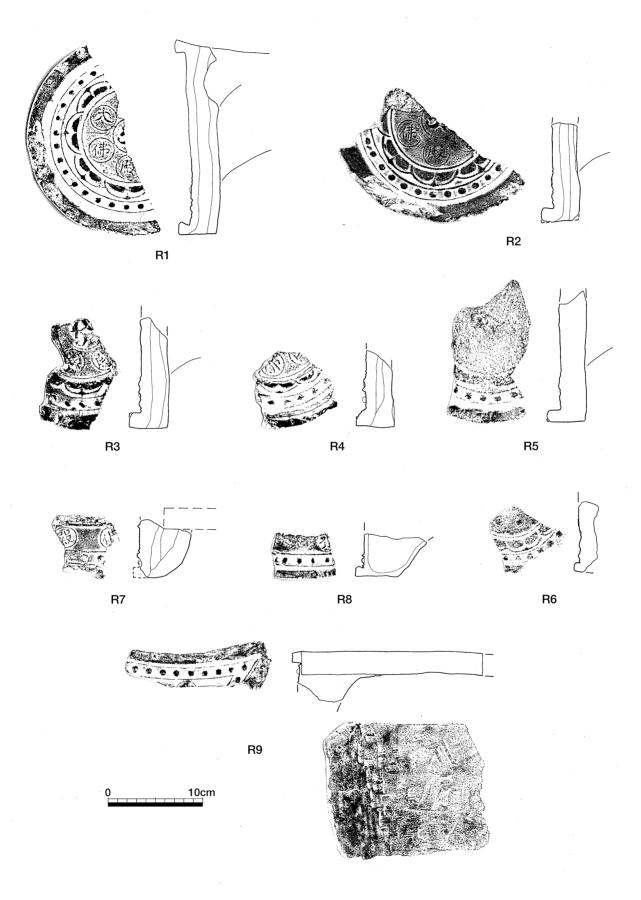
軒平瓦の文様は、軒丸瓦と同じように円環をめぐらせた梵字を中央に置き、その左右に「東大寺大仏殿」の銘文を1字ずつ円環に入れて配し、外区・脇区に珠文を配している。そして、文字を囲む個々の円の中が、半球状に盛り上がるものと平らなものとで大きく分かれる。

今回の調査では、軒丸瓦が大寺山地区から6点、上の山地区から1点出土し、軒平瓦が大寺山地区から1点、上の山地区から3点出土した。いずれも破片であることから、残りのよいものについて図示している(第56図)。

R1~R5は、東大寺瓦の軒丸瓦である。このうちR3は上の山地区、その他は大寺山地区から出土している。山崎信二氏の分類では、R1とR2が1類Eに、R3が1類Bに、R4が1類Aにあたるものと思われる。R5はマメツが著しく、よくわからない。いずれも範型に粘土を詰める時には、3回ほどに分けて詰めているようである。そして全体を丁寧にナデ調整している。

R6は上記のものとは文様が異なるが、類似した軒丸瓦である。他に2点上の山地区から出土している。これは、一般的な東大寺軒丸瓦より一回り小さく、中房に蓮子が配置されている。東大寺瓦窯操業時のものかその前後のものかは、出土状態からは判断できない。中房が梵字で、瓦の大きさが異なるが、岡山市一ノ宮字山神出土瓦として報告されているものに類似している(註4)。

R7~R9は、東大寺瓦の軒平瓦である。R7は大寺山地区、R8・9は上の山地区から出土して



第56図 瓦1 軒瓦(1/4)

いる。山崎信二氏の分類では、R7はAかB、R8・9はBにあたると思われる。R8の平瓦との接合面には、平瓦のキザミの痕跡があった。R9は、平瓦凸面との接合部に叩きの痕跡が残る。

2. 平・丸瓦

平瓦については、県報告でも指摘があるが、厚さの厚いもの(2.3cm前後)と薄いもの(1.6cm前後)がある。また、焼きのよい須恵質のものがほとんどであるが、瓦質や土師質などのものもある。調整は、凸面では叩目を明確に残すもの、叩き後にハケ状工具でナデ消したもの、ケズリやナデ消しをしているものがある。凹面では布目を残すもの、ナデ消したものがある。また、凸面には離れ砂の使用が見られ、中には多量に付着しているものも存在する。このように、瓦の厚さ、焼成、調整などに多様性がある。工人組織なども含めて、今後は万富産の焼成瓦を検討していく必要があると思われる。

丸瓦は、ほとんどが小破片であったが、玉縁付丸瓦の凸面は叩きを基本的にナデ消しており、凹面はほとんどのものが布目を残す。後述のように釘孔を持つものがある。平瓦同様に、厚さの厚いもの(2.6cm前後)と薄いもの(1.8cm前後)があり、胎土・焼成・色調は基本的に平瓦と同じである。また、凹面に「東大寺」刻印がみられるものが数点あった。

3. 叩目文様

「東大寺瓦」の特徴として平瓦凸面に残る叩目文様がある。県報告では、この叩目文様を1型から7型まで分類し、さらに1型を4種と3型を2種と分けているが、まだ細分できることを指摘している。また、1つの窯(群)で焼成された瓦の叩目文様の種類が限られることや、1型と7型が瓦窯操業初期のものと推定している。1型~6型は基本的に格子目文で、7型は縄目文である。

叩目文様の残る瓦は、県報告の分類に従って第57図のように分類した。それぞれ格子の大きさや線の太さなどから細分できるようであるが、5型についてのみ5A・5Bと2つに細分した。5Aは、県報告と同一のもので複線の斜格子文である。5Bは、5Aより格子の内角が異なって横長に交差している。5B-1は5型というよりも1Cに類似し、1Cの格子がまばらになっている感じに見える。5B-2は5B-1に交線が見られないもので、複線で波形になり、5型の範疇ではなく別の文様として考えた方がよさそうであるが、今回はここに含めた。この2つの型は、防府阿弥陀寺から1B・3A・7型と共に出土している(註5)。

表1は、文様別に瓦数量を表示したものである。県報告では数量で表されているが、今回の調査では出土量が多量であるため、重量で示している。

大寺山地区では1B・3A・7型が多く、上の山地区では1B・1C・5A・5Bが多い。場所によって文様が分かれることが推測され、窯(群)別に工人が分かれていた可能性がある。防府阿弥陀寺など東大寺以外に運ばれた瓦と、東大寺用の瓦と造り分けをしていたとも考えられる。

表2は、遺構別に瓦数量を表示したものである。

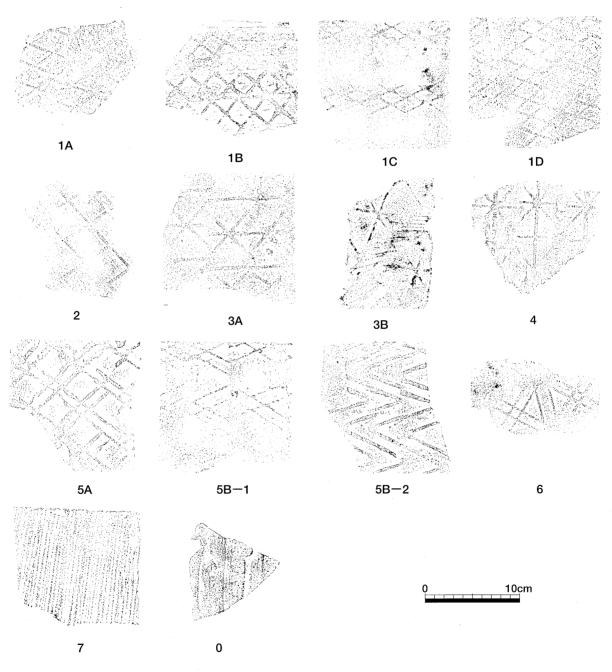
瓦窯(SO-1)は、焚口部のみであったため、瓦はほとんど出土していない。瓦だまりは先に述べたように(第4章第2節参照)、遺構に伴うものとして取り上げた数量が少なく、あまり参考にならないが、SK-1以外は $A\cdot7$ 型が主に出土している。瓦窯(SO-1)がSK-1を整地して造られていることが、数値に表れていると思われる。

瓦窯灰原は3A・7型が多いが、3B・5・6型を除いてほぼすべての文様が出土している。複数

の窯で焼成された瓦が、含まれていることが推測される。

礎石建物は、瓦を取り上げていないため、数値は破片点数を示した。**3 A型**が多く、**1 B・5 B・7型**が数点含まれる。不明のものを合わせて44個の瓦片を、地覆石がわりに利用していた。**3 A型**の 窯が近くにあるのか、**3 A型**の焼成時期に構築されたと推定できる。

排水施設は、遺構検出面までの堆積土層から出土した瓦重量である。**3 A · 7型**が圧倒的に多い。 構築時に近くの瓦窯から運んだとすると、近くにその型の叩目文様瓦を焼成した窯があったと考えられる。また構築時が、**3 A · 7型**が焼成されていた時期であるとも思われる。



第57図 平瓦叩目文様分類図(1/4)

表1 瓦出土数量表

単位:(kg)

型	B区(大寺山)	刻印	F区(上の山)	刻印	計	特 徴	県 報 告		備考
1A	3.7		1.2		4.9	斜格子文、格子が均等である		刻印有	
1B	11.3		11.8	. O	23.1	斜格子文、格子が菱形で2型 より小さい		刻印有	防府阿弥陀寺
1C	1.5		29.6	0	31.1	斜格子文、格子が不均等で ある			
1D	1.8	0	2.6		4.4	斜格子文、格子が均等で1A より小さい	·		
2	3.3	0	0.5		3.8	斜格子文、格子が均等で1A より大きく線が細い	13号窯埋土から多数出 土	刻印有	
- 3A	24	0	2.1		26.1	菱形文に横線を交点で交差 させたもの、格子が大きい	13号窯埋土から多数出 土	刻印有	防府阿弥陀寺
3B	1.5	0	0		1.5	3Aより菱形の内角が異なる			
4	1.5	0	0		1.5	3型に縦線を交点で交差させ たもの	10·11·12号窯埋土から多 数出土		
5A	3.4		140.8	0	144.2	1型や2型を複線にしたもの	「上の山」から多数出土	刻印有	
5B	3.4		28.5	0	31.9	5Aより格子の内角が異なる			防府阿弥陀寺
6	0.6		1.4		2	3型を複線にしたもの	2号窯内暗渠と3号窯窯 体着から多数出土	刻印有	
7	64	0	3.7		67.7	縄目文		刻印有	防府阿弥陀寺
0	173.5		333.8		507.3	叩目文様をケズリ消したもの (不明文様も含む)			
不明	55		25.2		80.2				
丸瓦	16.8		32.3		48.9	·			
計	365.1		613.5		978.6				

^{*}刻印は○印が出土しているもので、◎が多数出土しているもの

表2 遺構別瓦出土数量表

単位:(kg)

							平世·(Kg)
型	瓦窯(SO-1)	瓦だまり(SK-1)	瓦だまり(SK-2)	瓦だまり(SK-3)	瓦窯灰原(05トレンチ)	礎石建物	排水施設(08トレンチ)
1A	0	0	0	0	2	0	0
1B	0	0.3	. 0	0	0.7	3	0.4
1C	0	0	0	0	1.9	0	0.4
1D	0	0	0.3	0	0.8	0	0
2	0	0	0.5	0.4	1.7	0	0
3A	0.5	0	1.5	1.3	2.8	18	12
3B	0	0	0	0	0	0	0.7
4	0	0	0	0	0.2	0	0
5A	0.1	0	0	0	0	0	0
5B	0	0	0	0	0	1	1.1
6	0	0	0	0	0	0	0
7	0.6	0	3.1	1.8	5	4	13.
丸瓦	0	0	0.5	0	2.2	0	14.4
計	1.2	0.3	5.9	3.5	17.3	26	42

^{*}礎石建物の数値のみ点数

4.「東大寺」刻印瓦

「東大寺瓦」のもう一つの特徴として刻印がある。刻印は、縦約5cm、横約2cmの隅丸長方形で、外郭に突線を巡らせて「東大寺」銘を陽刻している。刻印の形態・文字などの種類は多種類におよび、多くは平瓦の凹面に1つあるのだが、まれに2・3つ押したもの、丸瓦の玉縁部近くの内面に押されたものが見られる。

県報告では、「東大寺」刻印の集成を行い、鐘楼修理報告(註6)と比較検討して、万富東大寺瓦 窯跡で焼成されたものが、東大寺鐘楼にも使用されていたことを指摘している。また、「東大寺」刻 印と叩目文様とが密接な関係にあると推測している。

今回の調査では約130点出土しており、2つ刻印のあるものや、丸瓦内面に押されたものもあった (註7)。ここでは、比較的残りの良いものを選び出して集成した(第58図)。比較数量に偏りがある が、簡単に検討を行う。

また、I グループと文字の形態や太さが類似するものは、1 C -2 、1 -1 、3 B -1 、3 -1 、7 -4 、7 -5 である。 II ・ III グループと類似するものは、3 -2 、4 -2 、5 A -3 、7 -1 である。なお、4 -1 は文字の形態が異なって細く、4 -3 は「東」の文字が異なっている。

Iグループはすべて上の山地区出土であり、Ⅱグループ、Ⅲグループはそれぞれ大寺山地区出土であることから、刻印によって地区別に分かれそうである。また、同一叩目文様でも数種類の刻印があり、違う叩目文様にも同一の刻印が見られる。

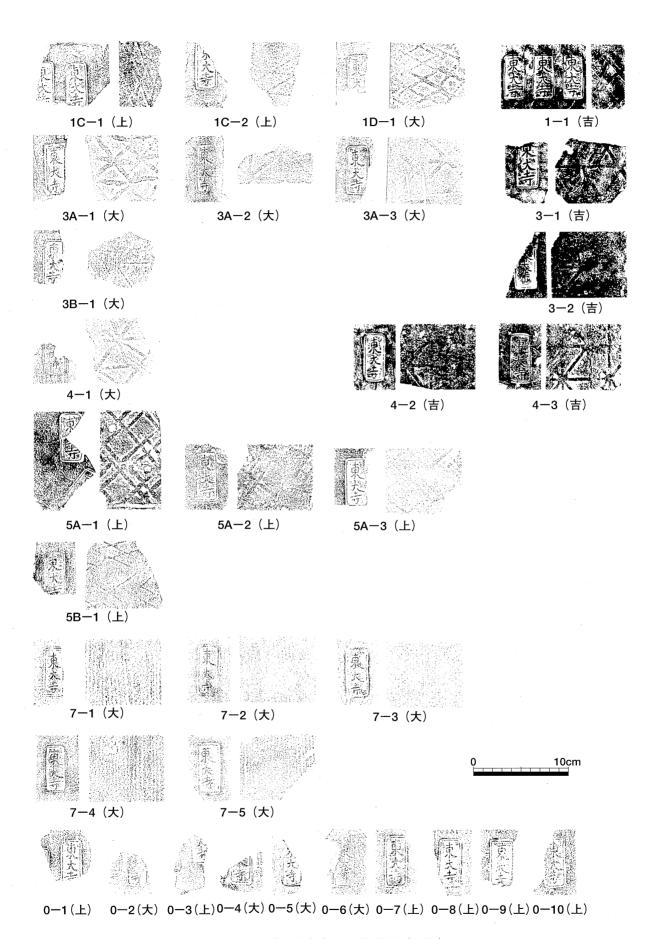
吉備津宮常行堂跡出土瓦の刻印は、叩目文様が $1\cdot 3A\cdot 3B\cdot 4$ 型と思われる。3-1は I グループに完全に一致しないが、非常に良く似ており、4-2も7-1とは完全に一致しないが、非常に良く似ている。

表1に見られるように、ほぼすべての叩目文様に刻印が見られた。しかし、すべての瓦に刻印が押されていたわけではないようである(註8)。現存しているすべての完形品を調べることにより、刻印の押された意味がみえてくるのではないかと思われる。

5. 特殊な瓦・製作技法等がわかる瓦・塼

今回の調査では、多数の瓦が出土している。その中には、特殊な形態のものが数点あるのでここに 報告しておく。

R14は、平瓦の凸面に四角い突出部が付いていたもので、1 C (5 B?)型と思われる叩目文様がある。R13は、同一個体ではないが、突出部の破片である。R13・14とも「上の山」から出土して



第58図 「東大寺」刻印集成図(1/4)

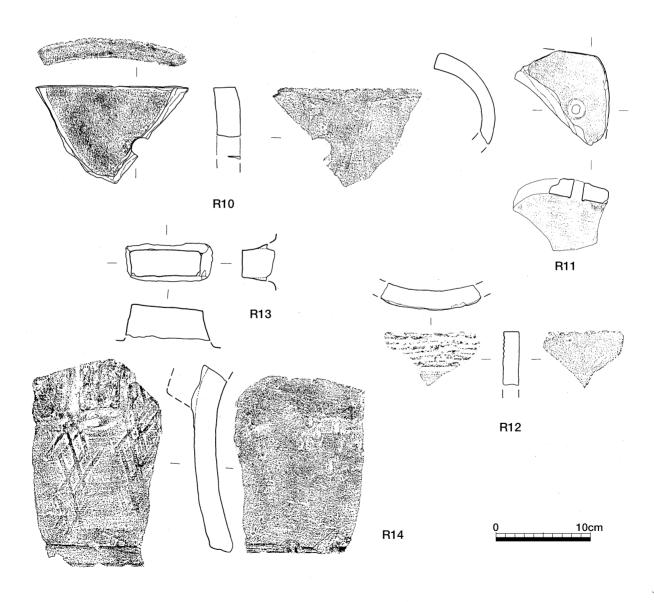
いる。R13とR14は、いわゆる引掛け瓦であり、軒平瓦の凸面に四角い粘土塊を接合したものと思われる。接合部は、ナデ調整されている。

このような引掛け瓦は、防府阿弥陀寺蔵の軒平瓦などにあり(註9)、生産地の万富窯での発見が 期待されていたものである。

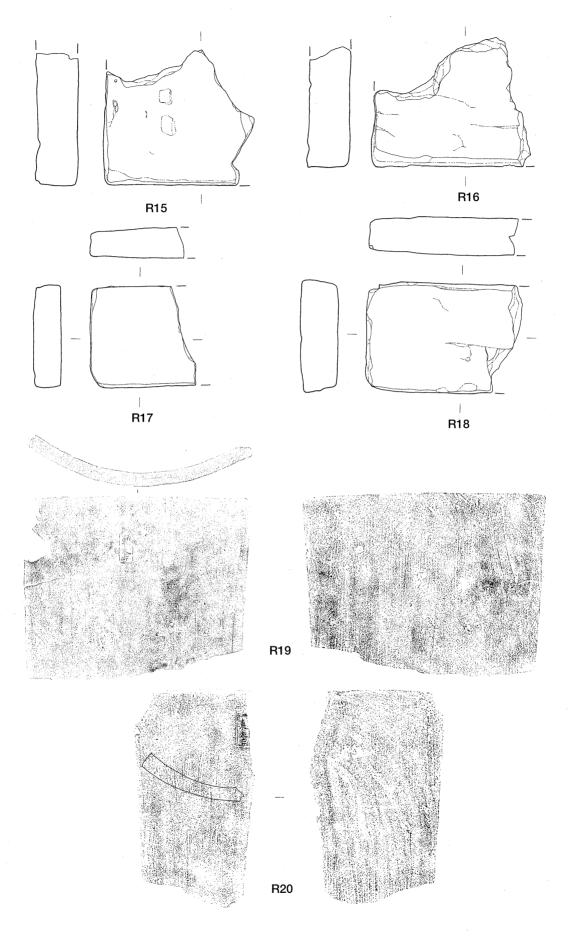
R12は、平瓦で凸面端部にキザミをつけている。これは、瓦当との接合状況がわかる資料であり、このようなキザミを持つ資料は、丸瓦端部片でも確認された。

R11は、丸瓦の玉縁部の破片で丸孔がある。R10は平瓦であるが、釘孔と思われる丸孔が開けられている。

なお、瓦とは異なるが、 塼が出土している(第60図)。平面の形がおそらく正方形になると思われるもの(R15·16)と、長方形になるもの(R17·18)の 2 種類あるようである。型枠に粘土を入れて、余分な粘土を削りとって製作しているようだ。全体にナデ調整されるが、削り取った面の調整は粗雑である。



第59図 瓦2 引掛け瓦ほか(1/4)



第60図 塼(1/4)・刻印瓦(1/6)

註

- 1 岡本寛久『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告37 岡山県教育委員会 1980
- 2 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所 2000
- 3 芦田淳一「鎌倉時の南都の造瓦―東大寺を中心に―」『重源のみた中世―中世前半期の特質―』シンポジウム「重源のみた中世―中世前半期の特質―』シンポジウム「重源のみた中世」実行委員会 2002
- 4 註1の第42図の1
- 5 防府市教育委員会『平成12年度防府市内遺跡発掘調査概要』防府市埋蔵文化財調査概要0201 2002
- 6 奈良県教育委員会『国宝東大寺鐘楼修理工事報告書』1967
- 7 註1文献では、万富出土、瀬戸町教育委員会保管、吉備津宮常行堂跡地出土、岡山県立博物館蔵品の瓦に2個・3個刻印を押印する例、丸瓦の内面に押印する例(第33図の2)が報告されている。
- 8 瀬戸町郷土館には、現地や吉井川川底から出土した瓦が収蔵されている。ほぼ完形の丸瓦7点、平瓦1点には、「東大寺」 刻印は見られなかった。
- 9 防府市教育委員会の杉原和惠氏から、防府阿弥陀寺蔵例をご教示いただいた。山崎信二氏の『中世瓦の研究』では、東大寺 例や小野市浄土寺例について記載がある。

第5章 出土瓦・土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白 石 純

第1節 分析の目的

万富東大寺瓦窯跡からは、瓦窯以外に日常で使用される土師質鍋、須恵質の擂鉢(備前系)などを 焼成したと考えられる土器窯が確認されている。また、瓦窯が立地する丘陵斜面部では、良質の粘土 が産出する。この胎土分析では、蛍光 X 線分析法により胎土中の成分(元素)量を求める方法で、瓦、 土器類の胎土を分析し、以下のことについて調べた。

瓦については、形態・技法的特徴により分類されているものが、胎土的に差異があるかどうか。また、瓦窯灰原およびその周辺で産出する粘土と、瓦の胎土が同じかどうか、比較検討した。

土器類については、土器窯(SO-3、4)から出土した土師質鍋、須恵質擂鉢(備前系)が、瓦 窯灰原およびその周辺で産出する粘土を使用して焼成されたのかどうか。また、この土器窯(SO-3、4)以外で出土した土器には土師質椀・鉢、小皿などがあり、これら両者の土師質土器の比較を 行い、胎土的に識別できるかどうかを検討した。

第2節 分析方法・結果

分析装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析計(セイコーインスツルメンツ社製2010L)を使用し、 試料、測定方法などは従来までの方法で実施した。

分析した試料は、表3に示した、瓦64点、土器48点、瓦窯・土器窯の窯壁9点、粘土17点である。

分析の結果、Si (珪素)、Ti (チタン)、A1 (アルミニウム)、Fe (鉄)、Mn (マンガン)、Mg (マグネシウム)、Ca (カルシウム)、Na (ナトリウム)、K (カリウム)、P (リン)、Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Zr (ジルコニウム)の13元素についての成分分析を行った。このうち、Ti、Ca、K、Rb、Srの各元素の差が見られることから、K-Ca、Ti-Ca、Rb-Srの各X Y散布図を作成して検討した。

1. 瓦の胎土分析

第61図K-Ca、第62図Rb-Srの両散布図は、瓦の散布図を示している。この散布図から瓦の形態・技法的特徴により11種類に分類されているが、これらの分類が胎土的には差異が見られず、ほぼ一つのグループにまとまった。そして、平・丸・刻印などの器種別に分類されている瓦の間でも、胎土的な差はなかった。また、瓦窯灰原および周辺で産出する粘土との比較でも、瓦と粘土の胎土がほぼ同じ分析値となった。しかし、万富太田住宅地の地下より採取した粘土は、Ca量が他の粘土や瓦よりやや多く含まれており、若干異なっていた。

2. 土器の胎土分析

第63図K-Ca、第64図Rb-Srの両散布図では、土器窯(SO-3、4)出土の土師質鍋、須恵質擂鉢(備前系)と備前擂鉢、および灰原出土の粘土との比較を行った。その結果、土器窯(SO-3、4)内出土の土師質鍋と須恵質擂鉢(備前系)は、ほぼ一つにまとまった。ただ、No.2擂鉢(備前系)のみは単独で分布し、他の擂鉢と異なっていた。

土器窯(SO-3、4)出土土器と備前擂鉢との比較では、第64図Rb-Sr散布図で両者ともほぼ識別された。そして、土器窯(SO-3、4)灰原出土粘土との比較では、粘土に比べて土器窯(SO-3、4)出土土器がSr量を多く含んで異なっていた。

第65図K-Ca、第66図Rb-Srの両散布図では、土器窯出土土器と土器窯以外から出土した土器との比較を行った。その結果、土器窯(SO-3、4)出土土器の分布範囲内には土師質鉢が入り、土師質椀や小皿は土器窯(SO-3、4)と分布範囲が半分ほど重複した。そして、第67図Ti-Ca散布図では、土器窯(SO-3、4)出土土師質鍋、土師質鉢、土師質土器(回転糸切り・ヘラ切り)、擂鉢(備前系)と、小皿、土師質椀の二つのグループに分類できた。

第68図のTi-Ca散布図では、土器窯(SO-3、4)出土土器と備前・亀山・勝間田の各窯跡試料とを比較した。その結果、土器窯(SO-3、4)出土の土器は、他の窯跡と識別できた。また、万富瓦窯跡より出土した外面に格子目タタキが施された甕の破片は、この散布図で勝間田焼の分布域に分布した。

第3節 まとめ

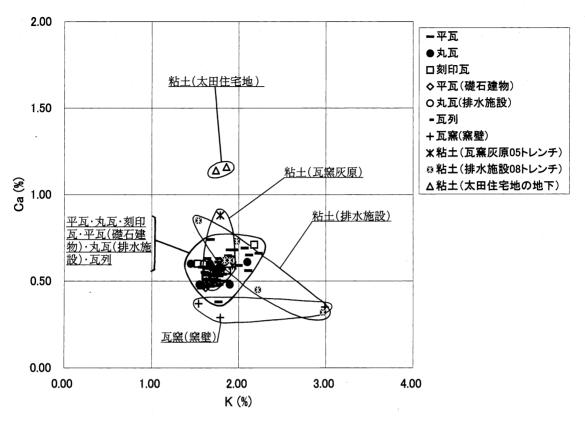
この胎土分析で明らかになったことを整理し、若干の考察を行い、まとめとしたい。

- (1) 瓦の分析では、器種・形態・技法的な違いが胎土に見られるかどうか調べたが、差は見られず、むしろ万富瓦窯の瓦として一つにまとまった。また、瓦窯灰原およびその周辺の粘土との比較では、瓦窯灰原の粘土とほぼ同じ胎土であった。また、万富太田住宅地の地下より出土した粘土とは、少し異なっていた。つまり、瓦より粘土の方に、Ca量がやや多く含まれていた。しかしながら、この点を除いて、万富瓦窯で生産された瓦は、遺跡周辺の粘土を使用して生産されていたと推定される。
- (2) 土器窯(SO-3、4)出土土器と、それ以外での出土土器の分析では、土器窯(SO-3、4)出土の土師質鍋と須恵質擂鉢(備前系)は、No.2擂鉢(備前系)を除く他のもの全てが、胎土的にほぼ一つにまとまった。そして、土器窯(SO-3、4)灰原出土の粘土との比較では、土器窯(SO-3、4)の土器と瓦窯灰原出土の粘土とは、ほぼ一致する傾向が見られた。以上のことから、万富瓦窯跡の周辺で産出する粘土には、分析値にバラツキが見られるものの、瓦と同様に、土器窯(SO-3、4)出土の土器も遺跡周辺の粘土を使用して焼成されたと考えられ、土器窯では土師質鍋や須恵質擂鉢(備前系)が生産されていたことが胎土分析で推測された。

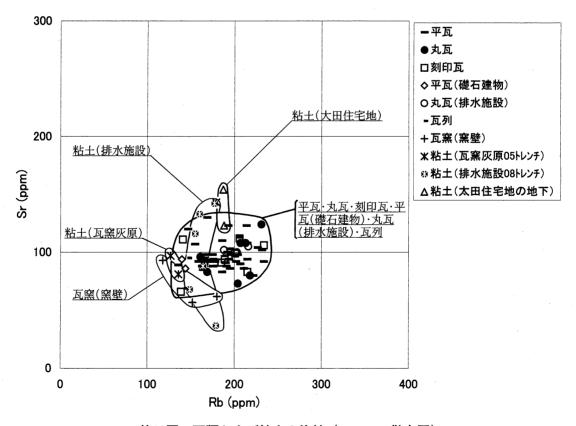
また、この土器窯(SO-3、4)以外から出土した土器では、土師質鉢、土師質土器(回転糸切り・ヘラ切り)が、この土器窯(SO-3、4)の胎土と類似していることが分かった。今後、分析

試料を増やして再検討する必要があるが、これらもこの遺跡の周辺で生産されていたのかもしれない。 以上のように、万富瓦窯跡で生産された瓦、土器類の胎土分析値の範囲がほぼ確定でき、今後の中 世瓦、土器の生産地推定に向けての基礎的なデータが揃った。また、中世須恵質土器の産地である備 前、亀山、勝間田などの生産地データと比較したところ、識別が可能であった。しかしながら、備前 や勝間田では試料点数が少ないこともあり、測定試料を増やして再検討する必要がある。

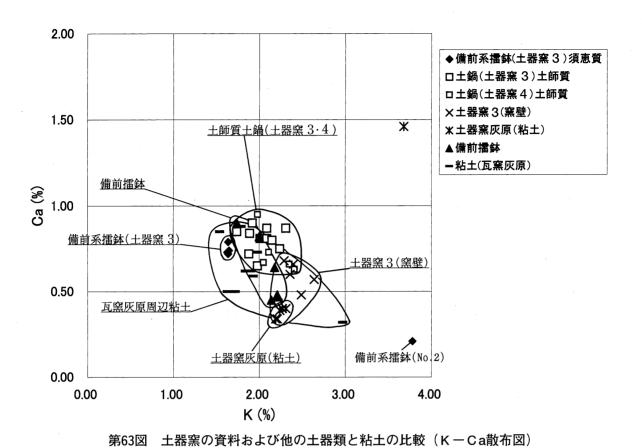
この胎土分析を実施するにあたり、岡山県古代吉備文化財センターからは、分析試料を提供して頂いた。記して感謝致します。



第61図 瓦類および粘土の比較 (K-Ca散布図)

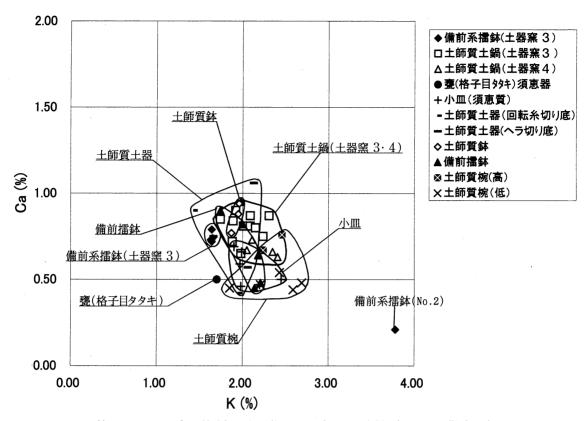


第62図 瓦類および粘土の比較 (Rb-Sr散布図)

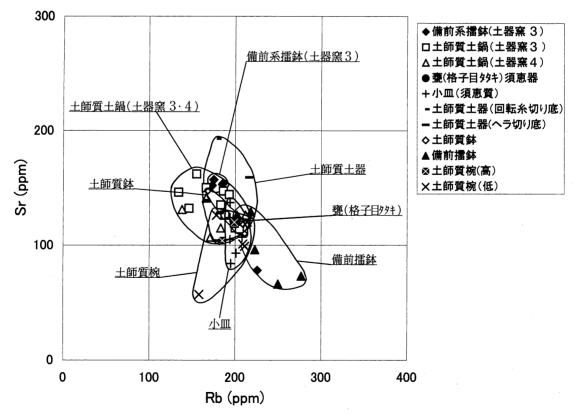


300 ◆備前系擂鉢(土器窯3)須恵質 口土師質土鍋(土器窯3) 口土師質土鍋(土器窯4) ×土器窯3(窯壁) 土師質土鍋(土器窯3・4) **X**土器窯灰原(粘土) 備前系擂鉢(土器窯 3) ▲備前擂鉢 200 -粘土(瓦窯灰原) ж 備前擂鉢 100 土器窯灰原(粘土) 備前系擂鉢(No.2) 瓦窯灰原周辺粘 0 0 100 200 300 400 Rb (ppm)

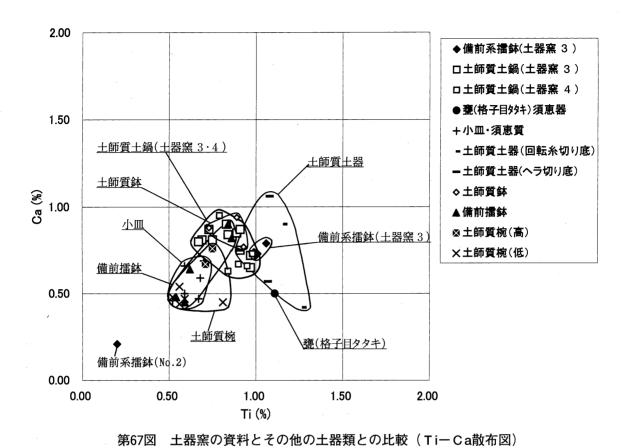
第64図 土器窯の資料および他の土器類と粘土の比較(Rb-Sr散布図)



第65図 土器窯の資料とその他の土器類との比較 (K-Ca散布図)



第66図 土器窯の資料とその他の土器類との比較(Rb-Sr散布図)



2.00 ◆備前系擂鉢(土器窯 3) 口土師質土鍋(土器窯3) 口土師質土鍋(土器窯 4) ●甕(格子目タタキ)須恵器 +小皿·須恵質 1.50 ▲備前擂鉢 土師質土鍋(土器窯 3・4) 備前系擂鉢(土器窯3) % 1.00 小皿 勝間田焼分布域 備前擂鉢 0.50 甕(格子目タタキ) 備前(ガンガ谷・弁天池)分布域 前系擂鉢(No.2) 亀山焼分布域 0.00 0.00 1.00 1.50 2.00 0.50 Ti (%)

第68図 土器窯の資料および土器類と各須恵質土器生産地との比較(Ti-Ca散布図)

表 3 万富東大寺瓦窯出土遺物の胎土分析一覧表(%) ただし、Rb·Sr·Zrはppm.

番号	遺構名	器 種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	土器窯(SO-3)	擂鉢(底部)備前系	68.31	1.06	17.29	6.35	0.08	1.47	0.79	2.64	1.64	0.22	186	154	296
2	土器窯 (SO-3)	擂鉢(底部)備前系	78.94	0.20	10.19	3.57	0.07	1.10	0.21	1.33	3.78	0.24	226	78	404
3	土器窯(SO-3)	擂鉢(体部)備前系	67.82	1.00	17.64	6.31	0.09	1.54	0.72	2.93	1.64	0.18	185	153	283
4	土器窯(SO-3)	擂鉢(体部)備前系	68.43	0.99	17.73	6.36	0.08	1.45	0.74	2.20	1.65	0.16	173	152	327
5	土器窯(SO-3)	擂鉢(体部)備前系	68.38	1.01	17.36	6.30	0.09	1.58	0.73	2.64	1.63	0.06	175	157	319
6 7	土器窯 (SO-3) 土器窯 (SO-3)	土鍋土鍋	67.70 70.27	0.73	18.32 17.01	5.79	0.06	1.35	0.87	2.47	2.31	0.27	188 200	126 115	261 255
8	土器窯(SO-3)	上鍋	70.57	0.73	15.78	5.46	0.03	1.32	0.85	2.79	1.74	0.22	134	146	273
9	土器窯 (SO-3)	土鍋	71.63	0.83	15.71	4.95	0.08	1.45	0.90	2.18	1.92	0.19	166	150	250
10	土器窯 (SO-3)	土鍋	71.42	0.91	15.55	5.51	0.09	1.22	0.87	2.05	2.09	0.15	186	147	294
11	土器窯 (SO-3)	土鍋	70.71	0.69	16.10	5.21	0.09	1.40	0.81	2.61	2.09	0.16	205	114	234
12	土器窯(SO-3)	土鍋	67.61	0.91	18.01	5.78	0.08	1.38	0.75	2.19	2.24	0.87	183	135	265
13 14	土器窯 (SO-3) 土器窯 (SO-3)	土鍋	68.32 69.54	0.97	17.88	5.82	0.09	1.54	0.65	2.34	1.98	0.23	146 155	132 162	273 316
15	土器窯(SO-3)	土鍋	69.85	0.67	16.79	5.29	0.08	1.48	0.72	2.50	2.15	0.03	199	119	219
16	土器窯 (SO-3)	土鍋	70.95	0.84	15.41	5.30	0.09	1.34	0.84	2.96	1.89	0.24	193	144	258
17	土器窯 (SO-3)	窯壁	76.87	0.49	12.34	3.24	0.09	1.28	0.48	2.22	2.49	0.32	178	90	257
18	土器窯(SO-3)	窯壁	75.05	0.55	13.29	3.56	0.07	1.40	0.57	2.41	2.64	0.29	196	103	280
19	土器窯 (SO-3)	窯壁	76.61	0.60	12.72	3.49	0.11	1.24	0.66	1.77	2.40	0.26	175	101	289
20	土器窯(SO-3)	窯壁	76.22	0.46	12.72	3.53	0.09	1.26	0.60	2.23	2.36	0.29	144	85	276
21 22	土器窯 (SO-3) 土器窯 (SO-3)	窯壁 窯壁	77.88	0.50	12.39 13.50	3.07 4.05	0.08	1.20	0.34	1.90 2.32	2.21	0.28	162 145	116	283 311
1	工品窯 (SO-3)	- <u>- </u>	66.03	0.56	18.57	6.44	0.10	1.29	0.66	2.32	2.29	1.00	183	115	319
2	土器窯(SO-4)	土鍋	68.94	0.90	16.91	6.06	0.07	1.34	0.67	2.42	2.05	0.44	171	107	262
3	土器窯 (SO-4)	土鍋	67.64	0.79	19.17	5.56	0.07	1.43	0.95	1.97	1.98	0.31	166	141	294
4	土器窯(SO-4)	土鍋	67.49	0.98	17.63	5.95	0.09	1.49	0.73	3.00	2.11	0.38	138	131	306
5	土器窯(SO-4)	土鍋	64.58	0.84	18.79	7.00	0.09	1.52	0.63	2.62	2.41	1.34	212	126	291
1	トレンチ3	土器窯灰原の粘土	77.18	0.46	12.47	3.14	0.08	1.27	0.34	2.37	2.19	0.31	145	72	264
3	トレンチ3 トレンチ3	土器窯灰原の粘土	76.77 76.94	0.52	12.51 12.54	3.26	0.09	1.36	0.40	2.31	2.27	0.37	141 170	71 69	280 275
4	トレンチ3	土器窯灰原の粘土	78.07	0.32	12.18	3.25	0.03	1.13	0.39	1.67	2.24	0.23	144	61	299
5	トレンチ3	土器窯灰原の粘土	72.47	0.34	13.16	4.18	0.07	1.29	1.46	2.87	3.68	0.21	283	170	275
1		須恵器 甕(格子目タタキ)	69.75	1.11	18.39	4.24	0.06	1.49	0.50	2.43	1.70	0.20	201	121	333
2		小皿	70.46	0.59	18.60	3.07	0.04	1.28	0.50	2.63	2.45	0.20	195	84	275
3		小皿	69.78	0.67	19.58	3.56	0.04	1.27	0.47	2.09	2.20	0.18	208	107	275
4 5		小皿 (底部)	69.16 70.50	0.70	19.00	4.05 3.69	0.03	1.45	0.69	2.38	1.90	0.47	194 194	137 124	272
6		小皿(底部)	70.30	0.59	18.60	3.57	0.05	1.38	0.66	2.76	1.97	0.20	201	93	236
7		小皿 (底部)	71.29	0.52	18.41	2.86	0.05	1.39	0.46	2.19	1.98	0.54	194	105	294
8		回転糸切り底	70.22	1.16	16.29	6.26	0.11	1.53	0.90	1.75	1.43	0.19	179	193	334
9		回転糸切り底	66.77	1.27	20.18	5.95	0.08	1.33	0.42	1.74	1.95	0.17	164	139	390
10		ヘラ切り底	63.94	1.08	17.34	8.60	0.15	1.47	1.06	2.81	2.13	1.21	216	159	272
11		ヘラ切り底 ヘラ切り底	65.99	1.07	19.59	6.23	0.11	1.67 1.25	0.57	2.31	2.06	0.19	178	104	304
12		鉢 (土師質)	64.64 66.43	0.91	18.87	7.30 6.90	0.09	1.25	0.75	2.46	1.66	0.49	182 211	110	214
14		鉢 (土師質)	69.70	0.93	17.13	5.60	0.08	1.41	0.77	2.13	1.87	0.22	209	118	290
15		鉢 (土師質)	69.64	0.89	15.74	5.69	0.10	1.37	0.94	2.47	1.96	0.98	168	147	287
16		備前擂鉢	69.88	0.62	19.40	3.68	0.04	1.22	0.64	1.97	2.18	0.17	223	96	258
17		備前擂鉢	66.98	0.84	18.34	6.76	0.11	1.51	0.90	2.48	1.74	0.16	202	126	268
18 19		備前擂鉢 備前擂鉢	71.22	0.59	19.00 19.55	3.20	0.04	1.19	0.45	1.69 2.10	2.14	0.22	250 277	66 73	306
20		備前擂鉢	70.05 68.52	0.54	17.28	5.84	0.03	1.45	0.48	2.73	2.21	0.23	218	129	273
21		上師質椀 (高)	70.41	0.75	18.29	2.62	0.04	1.25	0.76	2.99	2.46	0.25	199	120	462
22		土師質椀 (高)	69.38	0.71	20.03	2.93	0.04	1.22	0.67	2.34	2.24	0.28	185	104	356
23		土師質椀 (低)	68.90	0.81	21.06	3.37	0.02	1.06	0.45	1.78	1.85	0.51	158	57	237
24		土師質椀(低)	69.64	0.56	18.92	2.50	0.06	1.28	0.54	2.67	2.43	1.19	178	126	231
25 26		土師質椀(低) 土師質椀(低)	70.46	0.59	19.30	3.10	0.04	1.30	0.47	2.14	2.21	0.25	211	99	256 234
26		土師質椀(低) 土師質椀(低)	70.80 72.98	0.52	18.17	2.14	0.03	1.32	0.48	3.01 2.85	2.59	0.67	214	120	234
1	大寺山	平瓦凸面文様 1A	70.73	0.90	18.27	4.18	0.05	1.32	0.53	2.06	1.77	0.05	195	86	265
2	大寺山	平瓦凸面文様 1A	76.67	0.83	14.21	2.55	0.04	1.24	0.54	1.80	1.82	0.11	168	93	275
3	上の山	平瓦凸面文様 1A	73.95	0.92	15.64	3.36	0.04	1.32	0.47	2.50	1.61	0.07	147	69	278
4	上の山	平瓦凸面文様 1A	68.10	0.89	19.85	4.07	0.06	1.41	0.58	3.22	1.60	0.07	204	98	267
5	大寺山	平瓦凸面文様 1B	69.43	0.81	19.47	4.21	0.05	1.44	0.54	2.09	1.74	0.10	202	92	255
6 7	大寺山 上の山	平瓦凸面文様 1B 平瓦凸面文様 1B	70.21 74.68	0.77	18.55 15.25	3.64	0.06	1.41	0.63	2.63	1.78	0.12	195 172	103 92	230
8	上の山	平瓦凸面文禄 1B 平瓦凸面文様 1B	73.95	0.90	15.43	3.46	0.05	1.27	0.62	2.31	1.78	0.12	155	107	267
9	上の山	平瓦凸面文様 1B	74.39	0.92	15.45	2.90	0.03	1.29	0.62	1.86	1.77	0.15	147	120	287
10	上の山	平瓦凸面文様 1C	69.87	0.86	18.77	4.20	0.07	1.33	0.56	2.30	1.76	0.12	194	94	284
11	上の山	平瓦凸面文様 1C	68.59	0.97	20.36	4.33	0.08	1.31	0.53	1.76	1.78	0.09	222	80	287
12	大寺山	平瓦凸面文様 1D	72.64	0.86	16.79	3.59	0.04	1.31	0.58	2.16	1.77	0.10	186	83	275

番号		器 種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
13	上の山	平瓦凸面文様 1D	66.97	0.91	21.39	5.10	0.04	1.37	0.38	1.89	1.77	0.02	176	88	273
14	大寺山	平瓦凸面文様 2	77.04	0.87	14.10	2.30	0.04	1.23	0.47	2.00	1.68	0.14	136	89	277
15	大寺山	平瓦凸面文様 2	75.10	0.87	14.82	2.64	0.03	1.40	0.54	2.65	1.67	0.11	175	88	290
16	大寺山	平瓦凸面文様 3A	66.01	0.89	22.11	4.47	0.06	1.44	0.55	2.60	1.61	0.13	163	88	261
17	大寺山	平瓦凸面文様 3A	67.43	0.85	19.34	5.09	0.09	1.44	0.69	2.64	2.07	0.09	215	94	299
18	上の山	平瓦凸面文様 3A	73.34	0.86	16.39	3.02	0.05	1.24	0.68	2.17	1.90	0.20	193	123	259
19 20	上の山 大寺山	平瓦凸面文様 3A 平瓦凸面文様 3B	72.77	0.81	16.28 15.85	3.02	0.05	1.36	0.64	2.89	1.91	0.12	199 186	98 110	246
21	大寺山	平瓦凸面文様 4	73.55	0.85	15.94	2.91	0.05	1.33	0.58	2.66	1.80	0.07	190	91	269
22	大寺山	平瓦凸面文様 5A	67.03	1.00	20.41	5.35	0.06	1.41	0.68	1.86	1.95	0.12	214	123	300
23	上の山	平瓦凸面文様 5A	68.06	0.94	18.99	5.19	0.06	1.42	0.66	2.15	2.23	0.09	227	104	298
24	上の山	平瓦凸面文様 5A	73.06	0.85	16.56	3.09	0.05	1.27	0.55	2.62	1.74	0.04	159	92	288
25	上の山	平瓦凸面文様 5A	75.77	0.77	14.51	3.05	0.04	1.22	0.74	1.99	1.68	0.08	169	130	288
26 27	大寺山 上の山	平瓦凸面文様 5B 平瓦凸面文様 5B	68.93	0.72	19.39	4.03	0.06	1.49	0.63	2.81	1.64	0.07	208	107 94	254 300
28	上の山	平瓦凸面文様 5B 平瓦凸面文様 5B	65.15	0.92	22.31 21.28	4.51	0.06	1.59	0.51	3.05	1.62	0.05	176 196	98	275
29	上の山	平瓦凸面文様 5B	67.00	0.88	20.94	4.46	0.07	1.34	0.56	2.71	1.79	0.10	207	90	289
30	上の山	平瓦凸面文様 6	68.50	0.94	18.96	5.01	0.07	1.46	0.59	2.17	2.00	0.10	211	86	304
31	大寺山	平瓦凸面文様 7	67.89	0.95	20.23	4.52	0.05	1.36	0.50	2.48	1.76	0.10	178	92	257
32	大寺山	平瓦凸面文様 7	66.67	0.92	21.16	4.82	0.04	1.44	0.50	2.06	1.81	0.39	164	85	311
33	大寺山	平瓦凸面文様 7	73.61	0.93	15.98	2.91	0.06	1.35	0.57	2.51	1.81	0.11	165	95	288
34 35	上の山上の山	平瓦凸面文様 7	72.75 75.54	0.91	16.42 15.02	3.29	0.06	1.42	0.51	2.58 1.65	1.70	0.18	175 192	98 100	286 288
36	大寺山	平瓦凸面文様 0	68.15	0.80	18.86	4.96	0.04	1.17	0.65	2.56	2.12	0.16	234	92	288
37	大寺山	平瓦凸面文様 0	77.00	0.84	13.91	2.23	0.04	1.36	0.03	2.08	1.78	0.12	166	98	292
38	大寺山	平瓦凸面文様 0	67.87	0.85	20.26	4.28	0.06	1.37	0.56	2.34	2.11	0.15	232	102	264
39	上の山	平瓦凸面文様 0	64.25	0.88	21.55	4.23	0.07	1.93	0.46	4.81	1.57	0.09	191	88	278
40	上の山	平瓦凸面文様 0	67.64	0.89	19.86	4.79	0.07	1.49	0.54	2.87	1.63	0.09	215	108	283
41	上の山	平瓦凸面文様 0	67.65	0.79	20.59	4.66	0.07	1.37	0.58	2.37	1.58	0.12	206	113	260
42	大寺山 大寺山	丸瓦 丸瓦	67.39	0.97	20.73	5.14	0.05	1.32	0.48	1.56	1.90	0.32	169 218	83 80	333 271
44	大寺山	丸瓦	67.34	0.84	20.10	4.00	0.07	1.43	0.58	2.61	1.78	0.11	231	124	271
45	上の山	丸瓦	69.47	0.78	18.42	4.12	0.05	1.37	0.61	2.76	2.10	0.16	207	108	242
46	上の山	丸瓦	72.73	0.97	17.10	3.32	0.05	1.28	0.58	2.02	1.69	0.13	161	96	271
47	上の山	丸瓦	68.77	0.92	19.86	4.19	0.07	1.40	0.48	2.46	1.55	0.11	204	73	298
48	上の山	丸瓦	67.31	0.85	20.36	4.91	0.05	1.35	0.60	2.56	1.67	0.15	213	108	266
49	大寺山	刻印瓦 刻印瓦	75.57	0.89	14.41	2.98	0.04	1.26	0.49	2.25	1.75	0.19	139	66	326
50 51	大寺山 大寺山	刻印瓦	65.85 66.46	0.83	21.50 19.70	5.44 5.01	0.07	1.41	0.63	3.01	1.88 2.18	0.11	234 206	106 112	287 294
52	大寺山	刻印瓦	67.92	0.79	19.96	4.79	0.06	1.44	0.55	2.52	1.64	0.17	201	99	260
53	上の山	刻印瓦	71.21	0.89	17.28	3.21	0.05	1.53	0.56	3.17	1.87	0.10	185	91	264
54	上の山	刻印瓦	64.88	0.85	21.38	4.67	0.07	1.65	0.53	4.06	1.62	0.12	189	94	256
55	上の山	刻印瓦	66.32	0.93	21.48	4.46	0.07	1.37	0.51	2.91	1.71	0.11	215	83	304
56	上の山	刻印瓦	75.30	0.87	14.48	2.77	0.04	1.41	0.60	2.68	1.53	0.16	141	111	287
57 58	礎石建物	平瓦 平瓦	76.51 76.48	0.85	14.14	2.31	0.03	1.30	0.46	2.41	1.62	0.22	144 140	86 94	297 306
59	排水施設	丸瓦	65.66	0.94	21.80	5.04	0.05	1.49	0.49	2.33	1.78	0.24	188	102	284
60	排水施設	丸瓦	67.68	0.80	20.49	4.42	0.07	1.44	0.60	2.54	1.60	0.19	216	105	263
61	排水施設	丸瓦	66.33	0.77	20.68	4.49	0.06	1.49	0.61	3.25	1.84	0.19	203	100	292
62	瓦列		74.62	0.88	15.51	3.50	0.05	1.14	0.51	1.74	1.66	0.25	147	95	307
63	瓦列		66.86	0.84	20.88	4.88	0.05	1.36	0.62	2.23	1.84	0.22	172	92	278
64 65	瓦列 瓦窯 SO-1	窯壁	74.25 74.36	0.85	15.25 14.22	3.39	0.05	1.43	0.54	2.17	1.69 2.99	0.22	187	97 62	304 230
66	瓦窯灰原(05トレンチ)	<u></u> 窯壁	78.57	0.41	11.94	3.48	0.08	1.41	0.35	1.76	1.54	0.23	118	93	307
67	上の山(F-3e)	窯壁	77.04	0.58	12.67	3.73	0.10	1.35	0.29	2.07	1.79	0.20	152	57	291
68-1	瓦窯灰原(05トレンチ)	粘土	74.30	0.64	15.25	3.30	0.04	1.29	0.59	2.31	1.93	0.20	166	93	259
68-2	瓦窯灰原(05トレンチ)	粘土	72.08	0.80	16.44	3.45	0.05	1.46	0.88	2.71	1.79	0.17	179	143	284
69-1	瓦窯灰原(05トレンチ)	地山の粘土	76.49	0.54	12.64	4.38	0.06	1.24	0.50	2.13	1.63	0.20	127	97	297
69-2 70-1	瓦窯灰原(05トレンチ) 排水施設(08トレンチ)	地山の粘土 排水管内粘土	75.16	0.58	13.57	4.43	0.06	1.23	0.50	2.41	1.72 2.22	0.17	136 149	81 68	310 270
70-1	排水施設(08トレンチ)		74.67 80.85	0.45	12.20 11.07	5.69 1.99	0.24	1.34	0.45	0.80	2.22	0.18	179	37	213
71-1	排水施設(08トレンチ)	地山の粘土	74.56	0.63	13.97	5.14	0.14	1.19	0.52	1.66	1.84	0.24	155	116	317
71-2	排水施設(08トレンチ)	地山の粘土	75.22	0.67	14.20	3.37	0.06	1.24	0.73	2.21	1.98	0.18	160	133	287
72-1	排水施設(08トレンチ)	粘土	67.03	0.83	20.88	4.54	0.06	1.41	0.85	2.60	1.54	0.15	177	142	235
72-2		粘土	73.83	0.65	14.51	4.16	0.16	1.31	0.62	2.51	1.90	0.19	164	88	298
73-1	万富太田(宅地地下粘土)		63.30	1.17	19.82	8.53	0.18	1.63	1.14	2.25	1.74	0.08	188	123	274
73-2	万富太田(宅地地下粘土)	L	64.03	1.17	19.98	7.22	0.17	1.75	1.16	2.29	1.86	0.14	187	154	283

第6章 まとめ

1. 遺構について

(1) 古墳時代

大寺山地区では、科学探査を行っている時から、5世紀代の須恵器片が表採されている。発掘調査中も、同時期の須恵器片が出土した。古墳時代の遺構は発見されなかったが、「大寺山」丘陵に古墳などが存在していたと推測され、東大寺瓦焼成など大規模な後世の開発により、破壊されたものと思われる。ただし、万富周辺では、松尾古墳群などの後期の群集墳が多い。

(2) 万富東大寺瓦窯操業時(鎌倉時代初頭)

今回の調査では、万富東大寺瓦窯の中心的存在である瓦窯の確実なものは、1基(SO-1)しか確認できなかった。しかし、その周囲の瓦だまり(SK-1、2、3)から、その山側(東側:現在は墓地となっている)には未確認の瓦窯があるものと考えられる。

また、05トレンチから瓦窯の灰原が確認されている。この灰原に伴う瓦窯は確認できていないが、科学探査結果から隣接する東の段に2基の窯体の可能性が指摘されている(第3章 第20図c、d)。この灰原は、出土瓦にほぼすべての叩目文様があることから、複数の窯で焼成された瓦が堆積したものと推測される。

瓦窯以外の注目される遺構としては、礎石建物、排水施設がある。これらは、瓦窯・工房以外の遺 構として、初めて明確に確認されたものである。

礎石建物は、南東隅しか残存していなかったが、地山面を削って整地した後に礎石を据え、その間にやや小型の石や「東大寺瓦」片を、地覆石として利用している。その石・瓦列の上には、おそらく塗壁があり、壁の内側に小型の石を置いていたようである。また、雨落ち溝のコーナーが丸く、遺構検出面で周囲から瓦があまり出土していないことから、おそらく草葺屋根であったと思われる。建物は、南北が桁行、東西が梁行で、5間×2~3間であると推定される。地覆石に瓦を利用しているのは、瓦生産地であり、瓦の方が平坦面を揃えるのに実用的であったからであろう。また、柱は壁に塗り込められていたと考えられ、香川県長尾町「細川家住宅」のような建物であったと推測される(註1)。礎石使用の立派な建物であったことから、行動力豊かな重源上人が訪れていた可能性は大きい。排水施設は、東西約2mしか残存していなかったが、丸瓦と平瓦の完形品を利用している。このような状態に平瓦と丸瓦を組み合わせている暗渠は、他に例がなく、珍しいものであり、瓦生産地ならではのものと思われる(註2)。あえて暗渠にしているのは、その上面を作業場や作業道などとして利用していたと考えられる。東側に排水を要する施設があったと思われるが、どのような施設であったのかは不明である。今後の調査に期待したい。

(3) 土器窯操業時(鎌倉時代中頃~室町時代初頭)

土器窯2基(SO-3、4)は、礎石建物や掘立柱建物、瓦列の南側に隣接して検出された。出土した土器や遺構の切り合いから、礎石建物(東大寺瓦窯操業時)より新しいものである。穴窯を構築して備前系須恵質土器や瓦質・土師質土器を焼成した後、ダルマ窯を構築して鍋や釜を主体とする瓦質・土師質土器を焼成したと考えられる。SO-3は、鎌倉時代中頃を中心に、SO-4は、鎌倉時代後半から室町時代初頭に操業されたと推定される。

なお、両窯で焼成された土器は、胎土分析によって在地粘土、「東大寺瓦」と一致している。胎土は、全体的に砂粒を多く含み、「東大寺瓦」も同様である。胎土の砂粒の多さが、万富で焼成された焼物の一つの特徴といえるだろう。

また、礎石建物北側の溝(SD-1)内の堆積土と10トレンチの溝内の堆積土には、多数の瓦質・ 土師質土器を含んでいた。「大寺山」の各所で、土器窯が構築されていた可能性が考えられる。

掘立柱建物は、03、04、15トレンチで検出されたそれぞれ溝が、掘立柱建物の伴う同一のものと推測し、東西約8 m、南北約12mの区画溝の内側に構築されたと考えている。この建物は、土器製作の工房として、土器窯と並存していた可能性も考えられる。

(4) 瓦列(室町時代)

瓦列は、掘立柱建物が廃棄された後に、何らかの区画のために構築されたと考えている。壁などを 築くための地覆石的なものと推測すると、塀があった可能性も考えられる(註3)。もし塀であれば、 荘園領主や土豪の館や寺院があったのかもしれない。また、「大寺山」という地名から、かつて寺院 があったことを示しているという考えもある(註4)。

また、瀬戸町内の田原用水は、地名などから、それまでに既存していた堀を連結したと考える見方がある(註5)。「大寺山」を取り囲んでいる区間は、堀であったとは推定されていないが、館や寺院が存在していれば堀があっても不思議ではない。この時代は、民衆を布教の対象とした独創性豊かな宗派が多くあり、地方において自治的勢力が強まる頃である。いずれにしても、東大寺瓦生産や土器生産以外の、大規模施設の存在を思わせる遺構である。

2. 万富産東大寺瓦

「東大寺瓦」およびその関連する瓦の消費遺跡としては、県内では遺跡に隣接する阿保田神社境内のほか、吉備津宮常行堂(岡山市吉備津彦神社境内)、備前国府近くの大湯屋(岡山市湯泊浄土寺境内)などがある(註6)。県外では奈良東大寺以外に、東大寺造営料国であった周防国府や周防国別所が置かれた阿弥陀寺で出土しており(註7)、重源上人と関わりのあるところである。

万富窯の東大寺瓦は、東大寺だけでなく、重源上人が関わっていた建物(施設)にも使用されているようである。今後、これまで出土報告のない重源上人が設置した、別所や東大寺造営料国であった 国府、結縁した寺院から万富産「東大寺瓦」が発見・報告されることが予想される。

3. 備前系須恵質土器焼成窯

今回の調査で発見された備前系須恵質土器焼成窯(SO-3)は、間壁編年備前 II 期にあたるものを主に焼成している。出土した器種は、鉢・甕・皿・椀・壺があり、備前市伊部の周辺で生産されているものと形態も類似している。鉢・甕は、この窯で焼成されたものと思われるが、皿・椀は胎土や調整に違いがみられ、すべてのものが焼成されたかどうかはわからない。また、壺もよくわからない。また、瓦質・土師質土器の鍋・釜も出土している。焼き過ぎて須恵質土器に近いものもあることから、これらも焼成していた可能性が考えられる。

万富周辺の松尾古窯付近(註8)や鍛冶屋(註9)から、初期備前焼に類似する土器の破片と窯壁 片が多数出土している。備前Ⅱ期に類似する焼物の焼成窯が、万富周辺にあることは注目すべき点で ある。今後、これらのほかに伊部周辺以外の吉井川下流域で、初期備前焼に類する焼成窯が発見・調 査される可能性があると思われる。

4. 瓦質·土師質土器焼成窯

瓦質・土師質土器焼成窯は、県下で 4 例が発掘調査で明らかとなっている (註10)。三手向原遺跡の報告では、草原氏がその 4 例の比較検討と三手向原 1 号窯の復元を試みている (註11)。

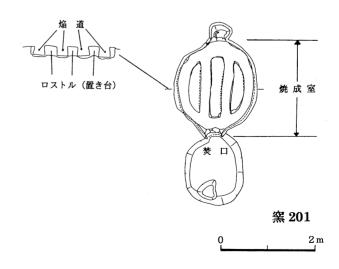
しかし、今回の調査で見つかった土器焼成窯(SO-4)は、これまで県内で調査されたものと 形態がやや異なる。三手向原 1 号窯を含む 4 例は、焼成部がほぼ円形であり、一部には分 焰のため に礫を用いているものがあるが、明確な分 焰床(ロストル)はない。

今回の調査の窯は、しっかりと分 焰 牀が造られており、燃焼部も取り込んだ楕円形である。分 焰 牀を持つ形態は、大阪府貝塚市のものがあり(註12)、このような窯は近畿に 3 例ほどあるようである(註13)。ただし、貝塚市の調査例のものなどは瓦窯であり、万富例は土器窯である。この違いは気になるが、ひとまず瓦質・土師質土器焼成も可能であると考える。また、SO-4から出土した鍋や釜などの瓦質・土師質土器は、その土器の形態が畿内系の様相を示しており、畿内地方の工人との関わりが考えられる。

今回の調査では、瓦質・土師質土器焼成窯およびその灰原以外に、B区の調査トレンチで瓦質・土

師質土器窯の灰原と思われるものが、2 か所確認されている。SD-1と10トレンチ検出の溝である。このことから、今 回発見された窯以外にも、この万富東大寺 瓦窯の周辺には、鍋や釜などの瓦質・土師 質土器焼成窯があることが予想される。

隣の山陽町に所在する三蔵畑遺跡では、鍋や釜を主体に焼成された12世紀末~13世紀代の土師質土器焼成窯が検出されている(註14)。この1例だけでは無理があるが、この瀬戸町・山陽町近辺は鍋や釜の生産地帯であったのかもしれない。



第69図 貝塚市 加治・神前・畠中遺跡(註12)

案内や灰原から出土した土器には、鍋・釜が多く、鉢、皿(椀)も認められた。胎土分析の結果より、鉢・皿(椀)の胎土が窯内出土の土器の胎土と類似していることから、これらも焼成した可能性が考えられる。なお、吉備系土師質土器椀は、万富で焼成された東大寺瓦や瓦質・土師質土器の鍋・釜と比べて、胎土に砂粒をあまり含まないことから、この窯で焼成したものではなく、万富以外の地方から搬入されたものと思われる。この窯では鍋・釜を中心に焼成し、一部に鉢や皿・椀なども焼成していた可能性が考えられる。

この遺跡から吉井川をやや下ると邑久郡長船町「福岡の市」が所在し、ここで焼成された生活雑器が、「福岡の市」などに供給されていたと考えられる(註15)。

5. 万富東大寺瓦窯

万富東大寺瓦窯の南東には、吉井川を隔てて伊部を中心に、備前焼の産地がある。東大寺瓦窯操業時には、すでに備前焼の窯は成立(備前 I 期)しており、熊山山頂の寺院の瓦も焼いている。また、伊部には製品搬出に便利な片上湾が近くにあることから、「東大寺瓦」を焼成する条件には適している。しかし、備前焼の窯は備前国司(俊乗房重源)の勢力下ではなく、香登庄・熊山寺院の勢力下であることから、「東大寺瓦」は焼かれなかったと考える見方がある(註16)。「南無阿弥陀佛作善集紙背文書」には、建仁3年(1203)7月に備前国の郷・庄・保などから貢納されたものが記載されているが、当時の伊部地区が含まれていた香登庄については記載がない。このようなことから、国司の勢力がおよび、大量の瓦や材料(薪)を生産・運搬するのに適した地として、この万富が選定されたと考えられる。

万富東大寺瓦窯で生産された瓦は、鎌倉時代初期の東大寺再建時のもので、大仏殿だけでなく、少なくとも回廊・中門・南大門にも使用されている。操業期間は、備前国が東大寺造営料国になった建久4年(1193)頃から重源没年の建永元年(1206)までは、行われていたと考えられている(註17)。大仏殿は、江戸時代にも公慶上人により再建されており、約13万枚の瓦が使用されている(註18)。それより一回り大きい鎌倉時代再建の大仏殿では、それ以上の瓦が使用されたであろう。東大寺大仏殿落慶供養があった建久6年(1195)には大仏殿は完成しており、建久4年(1193)頃からわずか数年でそれを補う瓦が万富窯で生産されているのである。それは、遺跡前面の粘土を大量に採った跡が、池であったという伝承(註19)からも窺われる。

万富東大寺瓦窯は大仏殿瓦を焼成した産地であるが、重源の業績が書き留められた「南無阿弥陀佛作善集」でさえ、紙背文書に「吉岡御瓦」の語句があるのみである。しかし、遺跡近くの瀬戸町大井に残る「楠田権平本」という近世文書によって、その様子を多少は窺い知ることができる。

筆者は「楠田権平本」を実見していないが、『瀬戸町誌』に原文と執筆者の私見が記載されているので、紹介しておく(註20)。

備前磐梨郡梅村(現指定地付近)には、良質の土があるため、東大寺瓦を造る地に選定された。都からは役人や瓦職人など約80人が来て、作業員約50人がともに従事した。南都正八幡宮を勧請して社(現阿保田神社)を建て、役人詰所や作業場、宿舎などの建物が約40軒あり、瓦を焼成する窯は東・南・西にそれぞれ10基ずつの30基が造られた。それらすべてを竹垣が廻り、都合15万枚の瓦が造られて南都へ船で運ばれた(「楠田権平本」要約)。

『瀬戸町誌』の執筆者は、窯の位置関係を阿保田神社から見た位置と考え、東窯が国指定地の窯跡、

南窯が「上の山」の窯跡、西窯は未発見であるとしている。また、地形等から瓦を積み出した港は、「大寺山」南端部(梅遺跡)であると推定している(註21)。東大寺操業時の吉井川は、万富平野部に流れ込み、「大寺山」の南端と久津山の間を抜け、南方藁菰社の東を流れていたと考えられている(註22)。

「東大寺瓦」は、吉井川の倉地沖からも採集されている。また、吉井川下流域でも「東大寺瓦」が発見(註23)されていることから、吉井川を利用して瓦が船で運ばれていたことは確かであろう。

今回の調査で、東大寺瓦窯操業時の様々な施設の様子が、少しだが明らかになってきた。また、この地が、東大寺瓦窯操業以後に、生活雑器の生産もしていたことが分かった。しかし、筆者の力量不足でほとんどの遺構の規模を特定できず、その用途が不明なものが多い。また、情報収集不足で、他の類例を検討することがほとんどできなかった。有益なご教示を頂きながら、筆者が未熟なために、不十分な報告となったことをお詫びするとともに、これからも諸氏先輩方のご教示・ご指導をお願いしたい。

最後に、本報告書が無事に刊行できたのは、福田正継氏、田嶋正憲氏のご協力によるところが大きい。改めて深謝する次第である。

註

- 1 松本修自先生のご教示による。なお、「細川家住宅」は近世の建物であるが、中世でも同様の建物が見られるとのことである。
- 2 松本修自先生のご教示による。
- 3 松本修自先生のご教示による。
- 4 岡山県赤磐郡教育会『改修赤磐郡誌』1940による。『改修赤磐郡誌』には、「大寺山」南端部が平坦地であり、地名が「大寺」であることから、東大寺別院があったと推定している。
- 5 瀬戸町『瀬戸町誌』1985による。執筆者矢部秋夫氏の私論。
- 6 岡本寛久『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告37 岡山県教育委員会1980
- 7 防府市教育委員会『平成12年度防府市内遺跡発掘調査概要』防府市埋蔵文化財調査概要0201 2002
- 8 伊藤晃ほか『松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99 岡山県教育委員会 1995
- 9 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(1) ―備前焼の成立―」『倉敷考古館研究集報』1 1966
- 10 草原孝典『三手向原遺跡―中世土師質土器窯と集落遺跡の発掘調査報告―』岡山市教育委員会 2001による。岡山市三手向原遺跡、山陽町三蔵畑遺跡、鴨方町沖の店1号窯、笠岡市関戸廃寺の4例。
- 11 註10の草原孝典氏文献。
- 12 貝塚市教育委員会「加治・神前・畠中遺跡の発掘調査」『かいづか文化財だよりテンプス9号』2000
- 13 加治・神前・畠中遺跡の発掘調査担当者である、三浦基氏のご教示による。
- 14 岡山県山陽町教育委員会『岩田古墳群 他野山第2·5号墳・三蔵畑遺跡』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵 文化財発掘調査概報(6)1976
- 15 草原孝典氏のご指摘による。
- 16 a 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(1) —備前焼の成立—」『倉敷考古館研究集報』1 1966 b 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(3) —備前焼窯址の分布とその性格—」『倉敷考古館研究集報』5 1968
- 17 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所 2000
- 18 東大寺『東大寺』学生社1999
- 19 a 瀬戸町『瀬戸町誌』1985による。
 - b岡山県赤磐郡太田村・吉岡村立千種尋常高等小学校組合『太田吉岡村誌』1924によると、「良質の粘土を有するので、万富煉瓦工場が掘り採っている」との記載あり。

- 20 a 瀬戸町『瀬戸町誌』1985による。第2章第1節「東大寺再建と瀬戸町」矢部秋夫氏が執筆。
 - b 岡山県赤磐郡教育会『改修赤磐郡誌』1940による。「楠田権平本」の原文が記載。
 - c 岡山県赤磐郡太田村・吉岡村立千種尋常高等小学校組合『太田吉岡村誌』1924による。「楠田権平本」による原文が記載。
- 21 瀬戸町『瀬戸町誌』1985による。地形や用水路改修時に、多量の軒平瓦や刻印瓦が出土していることから、梅遺跡を瓦積み出し港と推定している。
- 22 瀬戸町『瀬戸町誌』1985による。
- 23 a 物部茂樹ほか『百間川米田遺跡 4 』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164 岡山県教育委員会 2002 b 熊山町の美作岡山道に伴う発掘調査で「東大寺瓦」が発見されていると、松本和男氏からご教示いただいた。

遺物観察表

軒丸瓦観察表

単位(mm)

													十匹(IIIII)
						瓦	当	面					
番号	型	式			Þ	<u>1</u>	<u>X</u>		外	-	<u>X</u>	出土場所	備考
街万	至 至	工	直 径	内区径	中草纹	林小四汉	漢字環径	弁幅	内 縁	外	縁	出土場所	佣 专
				内心往	中历任	凡子垛汪	() () () () () () ()	开帕	幅	幅	高		
R1	1類	Е	(208)	(138)	(97)	(34)	28	21	12	14	12	08トレンチ3層	東大寺瓦
R2	1類	Е	(214)	(144)	(102)	(37)	28	21	12	17	13	05トレンチ3層(黒褐色土)	東大寺瓦
R3	1類	В	(209)	(145)	(104)	(42)	26	20	13	16	11,	F-3cトレンチ2層	東大寺瓦
R4	1類	A	(204)	(140)	(100)	不明	(25)	20	12	16	10	08トレンチ2層	東大寺瓦
R5	1類	不明	(212)	(149)	(108)	38	不明	20	12	13	15	B-2トレンチ2層	東大寺瓦
R6	_	_	(166)	(125)	(88)	_	_	19	10	10	7	F-2トレンチ2層	東大寺瓦ではない。 中房に蓮子がある

軒平瓦観察表

単位(mm)

														. 中区(mm)
						瓦	当	面						
番	早那] 大		内] [<u>X</u>		外	- [<u> </u>		出土場所	備	考
THE	7 3	ET	直 径	中区恒	林宁理汉	漢字環径	しから性	工好区柜	的区屿	外	縁		VĦ	75
					凡于垛吐	供于垛社	上沙区闸	「アド区・畑	加心帽	幅	高			
R7	' A	λかB	不明	28	不明	22	不明	13	不明	不明	不明	08トレンチ3層		
R8	3	В	不明	不明	(22)	22	不明	12	不明	不明	不明	F―2トレンチ2層		
RS	•	В	不明	不明	不明	(20)	12	不明	12	10	9	F-3cトレンチ2層		

瓦類観察表

番号	北十	場所	種	別	法	量(cm	1)	色 調	胎士	焼成	形態・調整手法の特徴	備考
田勺	1444	<i>₹⁄0</i> 3771	生	נינג	長さ	幅	厚さ	色詞	ᄱᆚ	жж	形態・調整子伝の特徴	川 与
R10	20トレンチ	暗渠	平瓦	端部			2.5	青灰色	砂粒多く含	良	凸面端部をケズリで面取りし、全体にナデ 調整している。丸穴が穿孔される。	丸穴径21mr
R11	05トレンチ	3層	丸瓦	玉縁部			1.7	うすい黒灰色	砂粒多く含	良	端部はヨコナデ、外面はナデ調整、内面は 布目が残る。丸穴が穿孔される。	丸穴径11~1 mm
R12	Bー1トレンチ	2層	平瓦	端部			1.9	灰白色	砂粒多く含	良	凸面端部に幅3cmの深いキザミがある。ほかは丁寧なナデ調整。	瓦当部との打合面にキザミ を施している
R13	Fー2トレンチ	2層	引掛け瓦	突起部	7.3	2.8	3.4	青灰色	砂粒多く含	良	ケズリのちナデ調整。粘土を補充して平瓦 に接合	引掛け瓦突起 部の破片。 法量は上端面
R14	Fー3aトレンチ	2層	引掛け瓦	平瓦部			2.3	青灰色	砂粒多く含	良	凸面に突起を接合していた痕跡残る。叩目 文様は5B-1型。凹面はケズリやナデ調整 で一部に布目が残る。端部は面取りしている	
R15	08トレンチ	3層	塼				4.4	青灰色	砂粒多く含	良	裏はケズリのちはとんど未調整。ほかはナ デ調整するが粗い。	正方形の塼/ なると思われ
R16	B-1トレンチ	撹乱	塼				4.2	青灰色	砂粒多く含	良	裏はケズリのちナデだが粗雑。ほかはナデ 調整するが粗い。	正方形の塼/ なると思われ
R17	Fー3bトレンチ	2層	塼			10.6	3.0	青灰色	砂粒多く含	良	全面丁寧なナデ調整	長方形の塼/ なると思われ
R18	Fー3cトレンチ	2層	塼			11.5	3.9	うすい黒灰色	砂粒多く含	良	両面は丁寧なナデ。 端部はケズリのちナデ調整だが粗雑。	長方形の塼! なると思われ
R19	Bー1トレンチ	3層	平瓦			35.8	2.2	青灰色	砂粒多く含	良	凸面の叩目文様は7型、一部にケズリやナデ調整がみられる。凹面は端部を面取りし、ナデ調整で一部に布目が残る。「東大寺」刻印あり	凸面に砂粒z 付着
R20	08トレンチ	排水施設 付近	平瓦				2.2	青灰色	砂粒多く含	良	凸面の叩目文様は7型、一部にケズリやナ デ調整がみられる。凹面は端部を押えナデ して面をもたせる。全体にナデ調整で一部 に布目が残る。「東大寺」刻印あり	凸面に砂粒z 多く付着

土器観察表

	110元元3人											単位(cm)
番号	出土場	折	種別	器種		口径	長量(cm) 底径 器	色調	胎土	焼 成	形態・調整手法の特徴	備考
1	05トレンチ	3層	畿内系瓦質土器	釜(三足付)	口縁部	(14.5)		黄灰色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
2	05トレンチ	3層	吉備系土師質土器	椀	口縁部	(13.8)		灰白色	砂粒多く含む	良	外面下部に指押さえ痕	マメツが激しい 13世紀中葉
3	05トレンチ	黒色土	吉備系土師質土器	椀	底部		(7.2)	灰白色	砂粒微量含む、緻密	良	高台が高く、断面は台形	13世紀初頭
4	05トレンチ	2層	土師質土器	Ш	底部		(8.2)	灰白色	砂粒微量含む、緻密	良	ヘラ状工具使用痕	
5	05トレンチ	2層	土師質土器	· Ш	底部		(8.4)	浅黄橙色	砂粒微量含む、緻密	良	内面に重ね焼きの痕跡	
6	05トレンチ	黒色土	土師質土器	Ш	底部			褐灰色	砂粒微量含む、緻密	良	回転ヘラ切り痕、ロクロ目が見られる	
7	05トレンチ	3層	土師質土器	ш	底部			橙色	砂粒微量含む、緻密	良		マメツが激しい
8	05トレンチ	2層	備前系須恵質土器	鉢	口縁部			青灰色	砂粒含む	堅致	端部はやや中凹みするが、ほぼ平坦	間壁編年備前Ⅱ期
9	05トレンチ	2層	備前系須恵質土器	椀	底部		(5.8)	灰白色	砂粒含む	ややあまい	回転糸切り痕	間壁編年備前Ⅱ期
10	05トレンチ	3層	須恵器	甕	体部			灰色	砂粒少量含む	良	外面並行叩き	古墳時代
11	05トレンチ	3層	須恵器	甕	体部			灰色	砂粒少量含む	良	外面並行叩き	古墳時代、マメツが激しい
12	05トレンチ	黒色土	勝間田焼	魙	体部			暗灰色	砂粒含む	良	外面5mm四方の格子目叩き	胎土分析により、勝間 田焼と推定された
13	04トレンチ	黒褐色土	畿内系土師質土器	鍋	口縁部	(30.0)		暗灰黄色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕	13世紀後半から 14世紀前半
14	SD-1		畿内系土師質土器	鍋	口縁部	(31.0)		にぶい黄橙色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
15	04トレンチ	黒褐色土	畿内系土師質土器	鍋	口縁部	(38.0)		灰白色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕	13世紀後半から 14世紀前半
16	SD-1		畿内系土師質土器	鍋	口縁部	(37.0)		灰白色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕	13世紀後半から 14世紀前半
17	04トレンチ	黒褐色土	畿内系土師質土器	鍋	口縁部	(38.0)		灰黄色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕	13世紀後半から 14世紀前半
18	SD-1		吉備系土師質土器	鍋	口縁部	(34.0)		浅黄色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕。 口縁内面にハケメ痕	
19	SD-1		土師質土器	鉢	口縁部	(34.4)		浅黄色	砂粒多く含む	良	外面に指押さえ痕。内面にハケメ痕。	
20	SD-1		土師質土器	焙烙	口縁部	(32.5)		灰黄色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕	
21	SD-1		畿内系瓦質土器	釜(三足付)	口縁部	(18.4)		灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
22	SD-1		畿内系瓦質土器	釜(三足付)	口縁部	(20.3)		浅黄色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
23	SD-1		畿内系瓦質土器	釜(三足付)	口縁部	(17.0)		にぶい黄橙色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
24	SD-1		土師質土器	釜	脚部			灰白色	砂粒多く含む	良		
25	SD-1		吉備系土師質土器	椀	口縁部	(12.0)		灰黄色	砂粒微量含む、緻密	良		
26	SD-1		土師質土器	杯(皿)	底部		(9.0)	浅黄橙色	砂粒多く含む	良		
27	SD-1		土師質土器	杯(皿)	底部		(10.0)	にぶい黄橙色	砂粒微量含む、緻密	良	45 朝いにノース4位 テ. しょどもノナンカはフ	間壁編年備前Ⅱ期
28	SD-1		備前系須恵質土器	椀	口縁部	(15.8)		灰白色	砂粒微量含む、緻密	ややあまい	端部近くで摘み上げ丸くおさめる。 口縁端部に重ね焼き痕。	古墳時代
29	04トレンチ	黒褐色土	須恵器	魙	口縁部	(26.0)		灰色	砂粒少量含む	良		
30	SO-2		畿内系瓦質土器	釜	口縁部	(27.0)		灰色	砂粒多く含む	良	LL OU LA COLLEGE MANUEL E ACC	13世紀後半から14世紀前半
31	SO-2	3層	畿内系瓦質土器	鍋	口縁部	(32.2)		淡黄色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕。	13世紀後半から14世紀前半
32	SO-2	3層	畿内系土師質土器	鍋	口縁部	(36.0)		灰白色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕。	13世紀後半から 14世紀前半
33	08トレンチ	3層	畿内系瓦質土器	釜(三足付)	口縁部·脚部	(21.0)		灰色	砂粒多く含む	良	丁寧な調整	13世紀後半から14世紀前半
34	08トレンチ	3層	畿内系瓦質土器	釜(三足付)	口縁部			暗青色	砂粒多く含む	良	丁寧な調整	13世紀後半から 14世紀前半
35	08トレンチ	3層	瓦質土器	釜	脚部			灰黄色	砂粒多く含む	良		19冊紀然 坐 本さ
36	08トレンチ	3層	吉備系土師質土器	椀	口縁部	(11.9)		灰白色	砂粒微量含む、緻密	良	外面下部に指押さえ痕 外面下部に指押さえ痕	13世紀後半から 14世紀初頭 13世紀後半から
37	08トレンチ	3層	吉備系土師質土器	椀	口縁部	(11.6)		灰白色	砂粒微量含む、緻密	良	7下国 下司は〜1百1甲さえ派	13世紀後半から 14世紀初頭

番号	出土場	所	種別	器種		一口径	k量(cm 底径	器高	色 調	胎土	焼 成	形態・調整手法の特徴	単位(cm) 備 考
38	08トレンチ	3層	吉備系土師質土器	椀	底部	HIL	(7.6)	да по	灰白色	砂粒少量含む、緻密	良	高台が高く、断面はにぶい三角形	13世紀初頭
39	08トレンチ	3層	土師質土器	杯	口縁部	(14.2)			にぶい橙色	砂粒少量含む、緻密	良		13世紀前半
40	08トレンチ	3層	土師質土器	杯	口縁部	(13.6)			にぶい黄橙色	砂粒少量含む、緻密	良		13世紀中葉
41	08トレンチ	3層	土師質土器	杯	口縁部	(12.8)			灰白色	砂粒多く含む	良	底部にヘラ起こし?痕	13世紀中葉から後半
42	08トレンチ	3層	土師質土器	Ш	1/6	(8.0)	(5.5)	1.5	灰白色	砂粒少量含む	良		13世紀中葉から後半
43	08トレンチ	3層	土師質土器	Ш	1/6	(9.0)	(8.4)	1.3	灰白色	砂粒少量含む	良		13世紀中葉から後半
44	08トレンチ	3層	土師質土器	Ш	1/2	(9.4)	(7.2)	1.6	灰白色	砂粒少量含む	良		13世紀初頭
45	08トレンチ	3層	土師質土器	Ш.	1/4	(7.6)	(6.0)	1.4	にぶい橙色	砂粒少量含む	良		13世紀中葉から後半
46	08トレンチ	3層	土師質土器	Ш	3/4	8.0	6.7	1.2	にぶい橙色	砂粒少量含む	良	底部に調整工具の痕跡	13世紀中葉から後半
47	08トレンチ	3層	瓦質土器	火鉢	口縁部	(45.8)			灰色	砂粒多く含む	良		
48	08トレンチ	4層	備前系須恵質土器	椀	1/5	(14.6)	(5.8)	4.5	灰白色	砂粒含む	ややあまい	回転糸切り痕。口縁端部に重ね焼き痕	間壁編年備前Ⅱ期
49	08トレンチ	3層	備前系須恵質土器	壺	口縁部	(17.2)			灰白色	砂粒多く含む	ややあまい	外反して、短い水平部をもち、外部端は 丸みをもたせて終わらせる。 外面にロクロ痕跡残る	間壁編年備前Ⅱ期 マメツが激しい
50	08トレンチ	3層	備前系須恵質土器	甕	体部				灰白色	砂粒多く含む	良	内面にカキメ痕跡残る	マメツが激しい
51	09トレンチ	3層	備前系須恵質土器	鉢	口縁部	(20.0)			暗青色	砂粒含む	堅致	端部はやや傾斜し、ほぼ平坦である。 調整は丁寧でカキメのちナデ。 ハケメ痕残る。	間壁編年備前Ⅱ期
52	06トレンチ	2層	備前系須恵質土器	壺	口縁部				青灰色	砂粒含む	良	緩く外反して立ち上がり、端部は外側へ やや尖りぎみにおさめる	間壁編年備前Ⅱ期 灰や自然釉かかる
53	09トレンチ	3層	備前系須恵質土器	甕	口縁部				青灰色	砂粒含む	良	外反して立ち上がり、端部は下方へやや 垂れ下がりぎみに丸くおさめる	間壁編年備前Ⅱ期
54	06トレンチ	2層	備前焼	壺	口縁部				暗赤灰色	砂粒含む	良	外反して立ち上がり、端部は小さい玉縁 をなす	間壁編年備前Ⅲ期
55	06トレンチ	2層	備前焼	すり鉢	口縁部				灰色	砂粒微量含む	良	口縁帯を形成。浅い凹線が2条ある	間壁編年備前 V 期 焼き歪み
56	SO-3	上層	畿内系瓦質土器	鍋	口縁部	(30.0)			灰色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕。	13世紀後半から 14世紀前半
57	SO-3	上層	畿内系土師質土器	鍋	口縁部				灰黄色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
58	SO-3	上層	吉備系土師質土器	椀	底部		(5.4)		灰色	砂粒少量含む、緻密	良	高台が高く、断面はにぶい三角形	13世紀中葉から後半
59	SO-3	上層	畿内系土師質土器	釜	口縁部	(18.1)			淡黄色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
60	SO-3	上層	畿内系土師質土器	釜	口縁部	(25.0)			淡黄色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
61	SO-3	上層	瓦質土器	高台付皿	3/5	7.4	5.5	3.4	赤灰色	砂粒少量含む、緻密	良	脚部は、内部をくり抜いて「ハ」字状の 高台にしている。外観の調整は丁寧。	仏具の一形態と思 われる
62	SO-3	上層	備前系須恵質土器	Ш	底部				灰白色	砂粒含む	ややあまい	回転糸切り痕	間壁編年備前 Ⅱ 期 マメツが激しい
63	SO-3	上層	備前系須恵質土器	壺	口縁部				灰色	砂粒少量含む、緻密	堅致	外下方に垂れ下がる。 端部は丸くおさめる。	間壁編年備前Ⅱ期
64	SO-3	上層	備前系須恵質土器	鉢	口縁部				黄灰色	砂粒含む	ややあまい		間壁編年備前Ⅱ期
65	so-3	上層	備前系須恵質土器	鉢	口縁部				暗青灰色	砂粒少量含む、緻密	堅致	端部はわずかな段を持ち丸くおさめる	間壁編年備前Ⅱ期
66	so-3	上層	備前系須惠質土器	鉢	口縁部	(24.0)			暗青灰色	砂粒多く含む	良	器厚はほぼ均等。端部はやや中凹みするが平坦で口縁外側がやや突出し、鋭角 ではなく丸みをおびる	間壁編年備前Ⅱ期
67	SO-3	上層	須恵質土器	甕	底部				灰色	砂粒含む	良		
68	so-3	上層	須恵質土器	甕	体部				暗灰色	砂粒含む	良	ハケメ痕残る	
69	so-3	中層	畿内系土師質土器	鍋	口縁部	(36.2)			にぶい黄橙色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕。	13世紀後半から 14世紀前半
70	so-3	中層	畿内系瓦質土器	鍋	口縁部				灰色	砂粒多く含む	良	体部外面に指押さえ痕。	非常に焼きが良く、 須恵質のようである。 失敗作か?
71	SO-3	中層	備前系須恵質土器	椀	口縁部	(11.0)			灰黄色	砂粒少量含む、緻密	ややあまい	端部でやや肥厚して丸くおさめる。 口縁端部に重ね焼き痕跡	間壁編年備前Ⅱ期
72	so-3	中層	備前系須恵質土器	椀	口縁部	(13.8)			灰白色	砂粒多く含む	良	端部は丸くおさめる	間壁編年備前Ⅱ期
73	so-3	中層	備前系須恵質土器	鉢	底部				青灰色	砂粒多く含む	良		間壁編年備前Ⅱ期
74	so-3	中層	備前系須恵質土器	魙	体部				青灰色	砂粒含む	堅致		
75	so-3	下層	備前系須惠質土器	椀	口縁部·底部	(11.6)	(5.0)	(3.8)	灰色	砂粒多く含む	良	端部はやや鋭い	間壁編年備前Ⅱ期

口径 版径 器品		備 考 間壁編年備前 I 則 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後が良く、 14世紀前半 非常歴のようである。 大敗作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
77 SO-3 下層 備前系須恵質土器 鉢 底部 灰色 砂粒多く含む 良 78 SO-3 下層 備前系須恵質土器 甕 体部 灰色 砂粒含む 良 79 SO-3 下層 備前系須恵質土器 甕 体部 暗灰色 砂粒含む 良 80 SO-3 下層 備前系須恵質土器 甕 底部 暗灰色 砂粒含む 良 灰や自然種をかっ 長 日藤 野庭 野粒多く含む 良 日藤 野庭 野粒多く含む 良 日藤 野粒多く含む 良 日藤 野花須恵質土器 釜 日禄部 日禄部 日禄郎	(315)学。	13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 非常に焼きが良く、 須要でのようである。 大散作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
78 SO-3 下層 備前系須恵質土器 変 体部 灰色 砂粒合む 良 19 SO-3 下層 備前系須恵質土器 変 体部 暗灰色 砂粒合む 良 19 SO-3 下層 備前系須恵質土器 変 体部 暗灰色 砂粒合む 良 灰や自然種をから 10 SO-4 上層 畿内系土師質土器 金 口縁部 (28.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 11 SO-4 上層 畿内系土師質土器 金 口縁部 (24.0) 灰黄色 砂粒多く含む 良 12 SO-4 上層 畿内系五質土器 鍋 口縁部 灰色 砂粒多く含む 良 13 SO-4 上層 五質土器 鉢 口縁部 灰色 砂粒多く含む 良 14 SO-4 下層 畿内系土師質土器 金 口縁部 (23.6) 灰白色 砂粒多く含む 良 15 SO-4 下層 畿内系土師質土器 金 口縁部 (23.6) 灰白色 砂粒多く含む 良 17 SO-4 下層 土師質土器 金 田部 (24.0) にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 18 SO-4 下層 土師質土器 金 田縁部 にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 19 SO-4 下層 土師質土器 鍋 口縁部 にぶい橙色 砂粒多く含む 良 10 Sトレンチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 金 口縁部 灰黄褐色 砂粒多く含む 良 10 Sトレンチ 黒褐色土 畿内系五質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良 り面に指押されま 40 日縁部 日縁和 日本和		14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 非常に競きが良く、 須恵質のようである。 失敗作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
79 SO-3 下層 備前系須恵質土器 要 体部 暗灰色 砂粒含む 良 原や自然軸をかっ 1 日		14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 非常に競きが良く、 須恵質のようである。 失敗作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
80 SO-3 下層 備育系須恵質土器 甕 底部 暗灰色 砂粒含む 良 反中自然釉をかっ 81 SO-4 上層 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (28.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 良 82 SO-4 上層 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (24.0) 灰黄色 砂粒多く含む 良 良 83 SO-4 上層 張内系工質土器 鍋 口縁部 (23.6) 灰白色 砂粒多く含む 良 良 84 SO-4 上層 瓦質土器 鉢 口縁部 (23.6) 灰白色 砂粒多く含む 良 良 85 SO-4 下層 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (24.0) にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 良 87 SO-4 下層 土師質土器 釜 脚部 にぶい黄色 砂粒多く含む 良 良 88 SO-4 下層 畿内系土師質土器 鍋 口縁部 にぶい橙色 砂粒多く含む 良 良 89 SO-4 下層 土師質土器 鉢 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 90 の3トレンチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえま 外面に指押さえま 外面に指押さえま 外面に指押さえま 外面に指押さえま 外面に指押さえま 外面に指押さえま 外面に指押さえま かたのに指押さるま かたのにお押さるま かたのによりま かたのによりま かたのによりま かたのによりま かたのによりま かたのによりま かたのによりま か		14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 非常に競きが良く、 須恵質のようである。 失敗作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
80 SO-3 下層 備削系須恵質土器 競 底部 昭灰色 砂粒含む 良 81 SO-4 上層 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (28.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 82 SO-4 上層 畿内系土師質土器 釜 口縁部 一縁部 一縁部 灰色 砂粒多く含む 良 83 SO-4 上層 畿内系五質土器 鉢 口縁部 灰色 砂粒多く含む 良 84 SO-4 上層 瓦質土器 鉢 口縁部 灰色 砂粒多く含む 良 85 SO-4 下層 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (23.6) 灰白色 砂粒多く含む 良 86 SO-4 下層 土師質土器 釜 上部第二 釜 上部第二 巻 上部第二 上部第三 上		14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 非常に競きが良く、 須恵質のようである。 失敗作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
82 SO-4 上層 畿内系土師質土器 金 口縁部 (24.0) 灰黄色 砂粒多く含む 良 83 SO-4 上層 畿内系瓦質土器 錦 口縁部 灰色 砂粒多く含む 良 84 SO-4 上層 瓦質土器 鉢 口縁部 (23.6) 灰白色 砂粒多く含む 良 85 SO-4 下層 畿内系土師質土器 金 口縁部 にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 86 SO-4 下層 土師質土器 金 脚部 にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 87 SO-4 下層 土師質土器 鍋 口縁部 にぶい橙色 砂粒多く含む 良 88 SO-4 下層 土師質土器 鉢 口縁部 灰黄褐色 砂粒多く含む 良 90 03トレナチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 金 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 91 03トレナチ 黒褐色土 畿内系工質土器 山縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良	0	14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 非常に競きが良く、 須恵質のようである。 失敗作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
83 SO-4 上層 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 一		14世紀前半 非常に似きが良く、 須恵質のようである。 失敗作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
84 SO-4 上層 瓦質土器 鉢 口縁部 灰色 砂粒多く含む 良 85 SO-4 下層 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (23.6) 灰白色 砂粒多く含む 良 86 SO-4 下層 畿内系土師質土器 釜 脚部 にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 87 SO-4 下層 土師質土器 釜 脚部 にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 88 SO-4 下層 共師質土器 鉢 口縁部 灰黄褐色 砂粒多く含む 良 90 03トレンチ 黒褐色土 畿内系上師質土器 釜 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良	0	須恵質のようである。 失敗作か? 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
85 SO-4 下層 畿内系土師質土器 金 口縁部 (23.6) 灰白色 砂粒多く含む 良 良 86 SO-4 下層 畿内系土師質土器 金 口縁部 (24.0) にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 良 87 SO-4 下層 土師質土器 金 脚部 にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 良 88 SO-4 下層 土師質土器 鉢 口縁部 広ぶい橙色 砂粒多く含む 良 以大黄褐色 砂粒多く含む 良 89 SO-4 下層 土師質土器 鉢 口縁部 灰黄褐色 砂粒含く含む 良 皮 90 03トレンチ 黒褐色土 畿内系工師五書 金 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 水面に指押さえまり、 91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良 水面に指押さえまり、	0	13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
86 SO-4 下層 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (24.0) にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 87 SO-4 下層 土師質土器 釜 脚部 にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良 88 SO-4 下層 畿内系土師質土器 鍋 口縁部 にぶい橙色 砂粒多く含む 良 89 SO-4 下層 土師質土器 鉢 「灰黄褐色 砂粒多く含む 良 90 03トレンチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (25.0) 「灰白色 砂粒多く含む 良 91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 「灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえま	0	13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半 13世紀後半から 14世紀前半
87 SO-4 下層 土師質土器 金 脚部 にぶい黄色色 砂粒多く含む 良 88 SO-4 下層 畿内系土師質土器 鍋 口縁部 にぶい橙色 砂粒多く含む 良 89 SO-4 下層 土師質土器 鉢 口縁部 灰黄褐色 砂粒含む 良 90 03トレンチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 金 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良	0	13世紀後半から 14世紀前半
88 SO-4 下層 畿内系土師質土器 鍋 口縁部 にぶい橙色 砂粒多く含む 良 89 SO-4 下層 土師質土器 鉢 口縁部 灰黄褐色 砂粒含む 良 90 03トレンチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえま	0	14世紀前半
89 SO-4 下層 土師質土器 鉢 口縁部 灰黄褐色 砂粒含む 良 90 03トレンチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 釜 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえま	0	14世紀前半
90 03トレンチ 黒褐色土 畿内系上師質土器 釜 口縁部 (25.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえが 小面に指押さえが	0	13世紀後半から
91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえ並	0	13世紀後半から
91 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (30.2) 灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押され	0	14世紀前半
92 SK-4 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (37.0) 黄灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえ追		13世紀後半から 14世紀前半
	0	13世紀後半から 14世紀前半
93 03トレンチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 鍋 口縁部 (22.1) にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良		13世紀後半から 14世紀前半
94 SK-4 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (34.6) 黄灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえ歩	0	13世紀後半から 14世紀前半
95 SK-4 畿内系瓦質土器 鍋 口縁部 (40.2) 黄灰色 砂粒多く含む 良 外面に指押さえが	0	13世紀後半から 14世紀前半
96 03トレンチ 黒褐色土 畿内系土師質土器 鍋 口縁部 (25.0) にぶい橙色 砂粒多く含む 良		13世紀後半から 14世紀前半
97 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 釜 口縁部 (22.2) 黄灰色 砂粒多く含む 良		13世紀後半から 14世紀前半
98 SK-4 畿内系瓦質土器 釜 口縁部 (18.1) 灰黄色 砂粒多く含む 良		13世紀後半から 14世紀前半
99 03トレンチ 黒褐色土 畿内系瓦質土器 釜(三足計) 口縁部 (18.0) 橙色 砂粒多く含む 良		13世紀後半から 14世紀前半
100 SK-4 畿内系瓦質土器 釜 口縁部 (15.4) 暗灰黄色 砂粒多く含む 良		13世紀後半から 14世紀前半
101 03トレンチ 黒褐色土 瓦質土器 鉢 口縁部 (23.0) 灰色 砂粒多く含む 良 内面にスリメあり		
102 03トレンチ 黒褐色土 土師質土器 鉢 口縁部 (20.8) にぶい橙色 砂粒含む 良		
103 03トレンチ 黒褐色土 土師質土器 焙烙 口縁部 (20.6) にぶい黄橙色 砂粒多く含む 良		
104 03トレンチ 黒褐色土 吉備系土師質土器 椀 口縁部 (11.6) 明褐色 砂粒少量含む、緻密 良		
105 03トレンチ 黒褐色土 吉備系土師質土器 椀 口縁部 (10.2) 灰白色 砂粒少量含む、緻密 良		
106 SK-4 吉備系土師質土器 椀 底部 (4.0) にぶい橙色 砂粒少量含む、緻密 良	断面はにぶい三角形	14世紀中葉
107 03トレンチ 黒褐色土 吉備系土師質土器 椀 底部 (5.4) 浅黄橙色 砂粒少量含む、緻密 良	まにぶい三角形	13世紀後半から 14世紀初頭
108 03トレンチ 黒褐色土 土師質土器 皿 3/4 (6.2) (5.0) にぶい黄橙色 砂粒少量含む、緻密 良		マメツが激しい 14世紀中葉
109 SK-4	5。口縁端部に重ね焼	間壁編年備前Ⅱ期
110 03トレンチ 黒褐色土 備前系須惠質土器 椀 底部 (5.4) 灰白色 砂粒少量含む、縦密 ややあまい		間壁編年備前Ⅱ期
111 SK-4 土師質土器 皿 底部 橙色 砂粒少量含む、緻密 良		
112 SK-4 備前系須思質主器 すり鉢 口縁部	4坦でやや外側下方 に極細の櫛状工具に	間壁編年備前 Ⅱ期 グイビが谷より古い ものと思われる
113 03トレンチ 黒褐色土 備前系須恵質土器 鉢 口縁部 灰色 砂粒多く含む 良 端部上端は平坦 丸くおきめる。語中	で、外側下方にやや傾 は短くやや突出して は均等。	間壁編年備前Ⅱ期

								L 🗆 /	`		r			単位(cm)
14 14 14 14 15 15 15 15	番号	出土場	,所	種別	器種					色調	胎土	焼成	形態・調整手法の特徴	
15 15 15 15 計画を対しま 理	114	SK-4		備前系須恵質土器	鉢	底部				灰色	砂粒含む	良		間壁編年備前Ⅱ期
19 19 19 19 19 19 19 19	115	SK-4		備前系須恵質土器	甕	体部				暗灰色	砂粒含む	良	一部ハケメ痕残る	
17 17 17 17 17 18 17 18 17 18 18	116	SK-4		備前系須恵質土器	霕	体部				暗灰色	砂粒含む	良	一部ハケメ痕残る	
19	117	04トレンチ	2層	瓦質土器	すり鉢	口縁部	(37.2)			明黄褐色	砂粒多く含む	良	外面に指押さえ痕、内面に4条のカキメ	
15 16 17 17 18 2 2 2 2 2 2 2 2 2	118	04トレンチ	3層	吉備系土師質土器	椀	口縁部·底部	(13.0)	(6.4)	4.1	浅黄色	砂粒少量含む、緻密	良	高台が高く、断面はにぶい三角形。 外面下部に指押さえ痕。	13世紀中葉
120 12	119	03トレンチ	3層	吉備系土師質土器	椀	底部		3.8		浅黄橙色	砂粒少量含む、緻密	良	高台が低く、断面は台形。やや粗雑	14世紀中葉
12 12 12 13 13 13 13 13	120	03トレンチ	3層	土師質土器	鍋	把手				浅黄色	砂粒多く含む	良		「行平」形の鍋の把手
122 124 12	121	03トレンチ	3層	土師質土器	鉢	口縁部				灰黄褐色	砂粒含む	良		
122 201-1-1-2-2-2-2-2-2-2-2-2-2-2-2-2-2-2-2-	122	03トレンチ	3層	白磁	Ш	底部		(10.0)		灰白色	緻密	良		の白磁 13世紀中
12 12 12 12 13 13 13 13	123	03トレンチ	3層	白磁	Ш	口縁部	(11.0)			灰白色	緻密	良	口縁端部内面は釉薬が2mm幅分ない	貿易陶磁器 口禿 の白磁 13世紀中 葉から14世紀前半
122 124 124 124 124 125 124 125 124 125 12	124	04トレンチ	3層	須恵器	甕	体部				灰色	砂粒含む	堅致		
12 12 12 12 12 12 13 23 2	125	04トレンチ	3層	備前系須恵質土器	鉢	口縁部				灰色	砂粒多く含む	堅致	斜する。口縁外側が短くやや突出してい	片口部。間壁編年 備前Ⅱ期
127 O4トレチ 3명 新前兵急電圧器 休 日禄郎 日禄郎 「	126	04トレンチ	3層	備前系須恵質土器	鉢	口縁部				灰白色	砂粒多く含む	良	する。口縁外側がややにぶく突出してい	間壁編年備前Ⅱ期□
22 04トレナ 3元 6歳娩娩 寸分数 口縁節 1元 1元 1元 1元 1元 1元 1元 1	127	04トレンチ	3層	備前系須恵質土器	鉢	口縁部				灰色	砂粒多く含む	良	端部上面はやや凹むがほぼ平坦で、外側下方にやや傾斜する。口縁内端部が やや突出する。器厚は均等。	間壁編年備前Ⅱ期
125 (4)1-レク 3扇	128	04トレンチ	3層	備前燒	すり鉢	口縁部		,		にぶい赤褐色	砂粒含む	堅致	内湾気味に立ち上がり、外方に傾斜して 平坦面を幅広く持つ。端部はやや尖り突	間壁編年備前IV期
13-0 13-0 13-0 13-0 13-0	129	04トレンチ	3層	備前焼	すり鉢	底部				にぶい赤褐色	砂粒含む	堅致	内面にカキメ痕あり。	間壁編年備前IV期
132 04トレンチ 3磅 横前焼 突 口縁部 一	130	03トレンチ	3層	備前系須恵質土器	甕	口縁部	(28.4)			灰色	砂粒含む	良	反して先端を丸みを持たせてやや垂れ	間壁編年備前Ⅱ期
132 O4レンチ 36 東北系政政政治 44 12 45 45 45 45 45 45 45 4	131	04トレンチ	3層	備前焼	甕	口縁部				灰色	砂粒含む	良	反して先端をやや折り曲げ、丸みを持た	間壁編年備前Ⅲ期
133 04トレナ 清	132	04トレンチ	3層	東播系須恵質土器	鉢	口縁部				灰色	砂粒少量含む	良	方に丸みをもって傾斜する。口縁端部外	
134 04トレチ 清	133	04トレンチ	溝	畿内系瓦質土器	鍋	口縁部	(37.2)			灰白色	砂粒多く含む	良	外面に指押さえ痕	13世紀後半から 14世紀前半
135 03トレンチ 清 瓦賀土器 終 口縁部 「	134	04トレンチ	溝	畿内系土師質土器	釜	口縁部	(24.0)			にぶい黄橙色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
136 04トレンチ 満 吉福系土師質土器 椀 口縁部 (20.0) 4.5 3.1 におい黄色色 砂粒少量合む。設密 尺白色 砂粒少量合む。設密 ややあまい 端部がやや肥厚し、丸くおさめる。口縁 間壁編年備前 II 明 138 04トレンチ 満 端部系須恵質土器 椀 口縁部 (14.0) 灰白色 砂粒少量合む。設密 ややあまい 端部がやや肥厚し、丸くおさめる。口縁端部に重ね枕 間壁編年備前 II 明 139 04トレンチ 溝 土師質土器 Ⅲ 底部 5.2 にぶい橙色 砂粒含む 良 一般を切り仮。 マメンが激しい 140 04トレンチ 溝 土師質土器 加 口縁部 (8.8) にぶい橙色 砂粒含む 良 一般を水切り仮。 マメンが激しい 下午日 砂粒りく合む 良 一般を水切り板。 マメンが激しい 下午日 日本の 日本の	135	03トレンチ	溝	瓦質土器	鉢	口縁部				灰白色	砂粒多く含む	良	端部はやや肥厚する	マメツが激しい
137 04トレンチ 溝 備前系須恵質土器 椀 口縁部 (16.6) 灰白色 鈴を夕倉含む一般的ややあまい。端部に乗れぬき棺 間壁編年備前 II 明 138 04トレンチ 溝 上師質土器 Ⅲ	136	04トレンチ	溝	吉備系土師質土器	椀	口縁部·底部	(10.0)	4.5	3.1	にぶい黄橙色	砂粒少量含む、緻密	良	高台が低く、断面はにぶい三角形。	14世紀前半から中葉
138 04トレンチ 満 備前系須恵質土器 椀 口縁部 (14.0)	137	04トレンチ	溝	備前系須恵質土器	椀	口縁部	(16.6)			灰白色	砂粒少量含む、緻密	ややあまい		間壁編年備前Ⅱ期
139 04トレンチ 溝 土師質土器 皿	138	04トレンチ	溝	備前系須恵質土器	椀	口縁部	(14.0)		-	灰白色	砂粒少量含む、緻密	ややあまい	端部を丸くおさめる。口縁端部に重ね焼き痕	間壁編年備前Ⅱ期
140 04トレンチ 溝 土師質土器 皿 口縁部 (8.8) にぶい橙色 砂粒含む 良 製部上面は平田で外側下方にやや帽 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	139	04トレンチ	溝	土師質土器	Ш	底部		5.2		にぶい橙色	砂粒含む	良	回転糸切り痕。	
142 04トレンチ 溝 東橋系須恵質土器 鉢 口縁部 灰色 砂粒含む 良 端に仕みを持ずる「日縁部が大の間終する」口縁部が大の間に重ね検査解跡、面に重ね検査解跡、面に重ね検査解跡。 143 03トレンチ 土壌 畿内系瓦質土器 釜 口縁部 (23.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 13世紀後半から 144 03トレンチ 土壌 瓦質土器 釜 脚部 灰白色 砂粒多く含む 良 良	140	04トレンチ	溝	土師質土器	Ш	口縁部	(8.8)			にぶい橙色	砂粒含む	良		マメツが激しい
142 04トレンチ 溝 東橋系須恵質土器 鉢 口縁部 灰色 砂粒含む 良 端に仕みを持ずる「日縁部が大の間終する」口縁部が大の間に重ね検査解跡、面に重ね検査解跡、面に重ね検査解跡。 143 03トレンチ 土壌 畿内系瓦質土器 釜 口縁部 (23.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 13世紀後半から 144 03トレンチ 土壌 瓦質土器 釜 脚部 灰白色 砂粒多く含む 良 良	141	03トレンチ	溝	備前系須恵質土器	鉢	口縁部				灰色	砂粒多く含む	良	端部上面は平坦で、外側下方にやや傾 終する。口縁外側が短くやや突出してい る。器厚は均等。	間壁編年備前Ⅱ期
143 03トレンチ 土壌 畿内系瓦質土器 釜 口縁部 (23.0) 灰白色 砂粒多く含む 良 13世紀後半から 14世紀前半 144 03トレンチ 土壌 瓦質土器 釜 脚部 「 「 「 「 砂粒多く含む 良 「 「 「 「 「 「 砂粒多く含む 良 「	142	04トレンチ	溝	東播系須恵質土器	鉢	口縁部				灰色	砂粒含む	良	端部はやや肥厚し、口縁端部は外側下 方に丸みを持って傾斜する。口縁端部外	
145 03トレンチ 土壌 吉備系土師質土器 椀 底部 (4.0) 灰白色 砂粒含む 良 高合は低い、断面はにぶい三角形 7メッか激しい 14世紀中葉 14位紀中葉 140 03トレンチ 足少ト4 瓦質土器 選 口縁部 二 黄灰色 砂粒多く含む 良 148 03トレンチ 瓦列 備前系須恵質土器 椀 底部 (4.4) 灰色 砂粒含む ややあまい 回転糸切り痕 回転糸切り痕 四壁編年備前 I 明 7メッか激しい 149 04トレンチ 瓦列 備前発須恵質土器 選 底部 広部 灰白色 砂粒多く含む 良 日壁編年備前 I 明 150 04トレンチ 瓦列 備前焼 壺 口縁部 (11.2) オリーブ灰色 砂粒多く含む 良 九反した先端が丸く、玉縁状になる。外 回壁編年備前 I 明 自然軸、炭化粒付着	143	03トレンチ	土壙	畿内系瓦質土器	釜	口縁部	(23.0)			灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
146 03トレンチ ピット4 土師質土器 焙烙 口縁部 (10.9)	144	03トレンチ	土壙	瓦質土器	釜	脚部				灰白色	砂粒多く含む	良		
147 03トレンチ ピット4 瓦質土器 甕 口縁部 一 黄灰色 砂粒多く含む 良 一 しゃっかっか。 一 一 一 一 一 一 一 一 一	145	03トレンチ	土壙	吉備系土師質土器	椀	底部		(4.0)		灰白色	砂粒含む	良	高台は低い、断面はにぶい三角形	マメツが激しい 14世紀中葉
148 03トレンチ 瓦列 備前系須恵質土器 椀 底部 (4.4) 灰色 砂粒含く含む 良 四転糸切り痕 同壁編年備前 II 明 マメツが激しい 円型編年備前 II 明 日	146	03トレンチ	ピット4	土師質土器	焙烙	口縁部	(10.9)			灰黄色	砂粒多く含む	良		
148 03トレンチ 瓦列 備前系須恵質土器 椀 底部 (4.4) 灰色 砂粒含む ややあまい マメッか激しい 149 04トレンチ 瓦列 備前系須恵質土器 要 底部 灰白色 砂粒多く含む 良 間壁編年備前Ⅱ期 150 04トレンチ 瓦列 備前焼 壺 口縁部 (11.2) オリーブ灰色 砂粒多く含む 良 か反した先端が丸く、玉緑状になる。外 自然釉、炭化粒付着	147	03トレンチ	ピット4	瓦質土器	魙	口縁部				黄灰色	砂粒多く含む	良		
149 04トレンチ 瓦列 備前系須恵質土器 甕 底部 灰白色 砂粒多く含む 良 良 150 04トレンチ 瓦列 備前焼 壺 口縁部 (11.2) オリープ灰色 砂粒多く含む 良 か反した先端が丸く、玉緑状になる。外 間壁編年備前 II 関係権、炭化粒付着	148	03トレンチ	瓦列	備前系須恵質土器	椀	底部		(4.4)		灰色	砂粒含む	ややあまい	回転糸切り痕	間壁編年備前Ⅱ期 マメツが激しい
	149	04トレンチ	瓦列	備前系須恵質土器	甕	底部				灰白色	砂粒多く含む	良		間壁編年備前Ⅱ期
151 03トレンチ 瓦列 青磁 碗 口縁部 緑灰色 緻密 良 質易陶磁器 電文帯 碗。15世紀末代	150	04トレンチ	瓦列	備前焼	壺	口縁部	(11.2)			オリーブ灰色	砂粒多く含む	良	外反した先端が丸く、玉縁状になる。外 面頸部に凸線が1条めぐる	間壁編年備前 II 期 自然釉、炭化粒付着
	151	03トレンチ	瓦列	青磁	碗	口縁部				緑灰色	緻密	良		貿易陶磁器 雷文带 碗。15世紀末代

													単位(cm)
番号	出土場	計所	種別	器種		口径	k量(cm 底径	器高	色調	胎土	焼成	形態・調整手法の特徴	備考
152	10トレンチ	黒褐色土	畿内系瓦質土器	釜	口縁部	(28.4)			灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
153	10トレンチ	黒褐色土	畿内系瓦質土器	釜	口縁部	(26.0)			灰黄色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
154	10トレンチ	黒褐色土	畿内系瓦質土器	鍋	口縁部	(27.0)	-		灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
155	10トレンチ	黒褐色土	瓦質土器	鉢	口縁部	(26.0)			灰色	砂粒含む	良	端部は肥厚し、外端はやや突出する	
156	10トレンチ	黒褐色土	吉備系土師質土器	椀	口縁部	(11.8)			灰白色	砂粒少量含む、緻密	良	外面に指押さえ痕	13世紀後半から14世 紀初頭
157	10トレンチ	黒褐色土	吉備系土師質土器	椀	底部		(7.0)		淡黄色	砂粒少量含む、緻密	良	高台は高い、断面は台形	
158	10トレンチ	黒褐色土	吉備系土師質土器	椀	底部		(6.4)		灰白色	砂粒少量含む、緻密	良	痕高台は高い、断面は台形でやや「ハ」 字状になる	13世紀後半から14世 紀初頭
159	10トレンチ	黒褐色土	吉備系土師質土器	椀	底部		(5.5)		浅黄橙色	砂粒少量含む、緻密	良	高台は低い、断面は台形	14世紀前半
160	10トレンチ	黒褐色土	吉備系土師質土器	椀	底部		(5.4)		黄灰色	砂粒少量含む、緻密	良	高台は低い、断面は台形で「ハ」字状に なる、底部に指押さえ痕あり	14世紀前半
161	10トレンチ	黒褐色土	吉備系土師質土器	椀	底部		4.3		浅黄橙色	砂粒少量含む	良	高台は低い、断面はにぶい三角形	マメツが激しい 14世紀中葉
162	10トレンチ	黒褐色土	瓦質土器	鉢	口縁部	(18.3)			灰色	砂粒少量含む	良		
163	10トレンチ	黒褐色土	土師質土器	Ш	1/2	(7.5)	(6.8)	1.0	橙色	砂粒少量含む、緻密	良	回転へラ切り痕	13世紀後半から14世 紀初頭
164	10トレンチ	黒褐色土	土師質土器	Ш	1/8	(8.0)	(6.4)	1.4	浅黄橙色	砂粒少量含む、緻密	良		13世紀中葉から後半
165	10トレンチ	黒褐色土	土師質土器	Ш	1/6	(7.5)	(5.5)	1.2	にぶい黄橙色	砂粒少量含む、緻密	良		13世紀後半から14世 紀初頭
166	10トレンチ	黒褐色土	土師質土器	Ш	1/2	7.2	5.6	1.5	橙色	砂粒少量含む、緻密	良	回転糸切り痕。	
167	10トレンチ	黒褐色土	土師質土器	杯	3/5	(14.5)	(9.3)	3.3	浅黄橙色	砂粒少量含む、緻密	良	底部回転ヘラ切りのち板状工具による 調整	
168	10トレンチ	黒褐色土	備前系須恵質土器	椀	口縁部·底部	(17.0)	(6.4)	(6.1)	乳灰色	砂粒少量含む、緻密	ややあまい	口縁端部は肥厚ぎみに丸くおさめる。 底部回転糸切り痕。口縁端部に重ね焼 きの痕跡。	間壁編年備前Ⅱ期
169	10トレンチ	黒褐色土	備前系須恵質土器	椀	底部		5.8		灰白色	砂粒少量含む、緻密	ややあまい	回転糸切り痕	間壁編年備前Ⅱ期
170	10トレンチ	黒褐色土	須恵器	甕	体部				灰色	緻密	堅致	外面格子目叩き痕。	古墳時代
171	10トレンチ	黒褐色土	備前焼	すり鉢	口縁部				褐灰色	砂粒多く含む	良	口縁帯を形成。浅い凹線が2条ある	間壁編年備前Ⅳ~ V期
172	15トレンチ	3層	備前系須恵質土器	椀	底部		(5.0)		灰色	砂粒含む	良	回転糸切り痕が残る	間壁編年備前Ⅱ期
173	15トレンチ	4層	備前系須恵質土器	鉢	口縁部				青灰色	砂粒多く含む	良	口縁端部はやや傾斜し、 ほぼ平坦である。端部やや肥厚する。	間壁編年備前Ⅱ期 片口部
174	21トレンチ	暗渠	備前焼	すり鉢	底部				灰黄色	砂粒含む	良	内面にカキメ痕あり。	間壁編年備前Ⅲ期
175	B-1トレンチ	2層	青磁	碗	底部				オリーブ灰色	緻密	良	高台付碗	貿易陶磁器 龍泉窯 印花文碗 15世紀代
176	B-1トレンチ	2層	須恵器	甕	口縁部	(21.8)			灰色	砂粒含む	堅致	口縁部外側に2条の凸線めぐる	古墳時代
177	15トレンチ	3層	須恵器	魙	体部				灰色	砂粒含む	堅致	外面に平行叩き痕	古墳時代
178	Bー2トレンチ	2層	須恵器	甕	体部				灰白色	砂粒含む	良	外面に平行叩き痕、内面に同心円文叩 き痕	古墳時代
179	B-1トレンチ	2層	須恵器	甕	体部				灰色	砂粒含む	堅致	外面に格子目叩き痕	古墳時代
180	F-3aトレンチ	3層	畿内系瓦質土器	鍋	口縁部	(36.0)			灰白色	砂粒多く含む	良	外面に指押さえ痕	13世紀後半から 14世紀前半
181	Fー3aトレンチ	3層	畿内系土師質土器	釜	口縁部				灰黄色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
182	Fー2トレンチ	2層	畿内系瓦質土器	釜	口縁部	(28.0)			灰白色	砂粒多く含む	良	外面に指押さえ痕	13世紀後半から 14世紀前半
183	F-3aトレンチ	3層	土師質土器	鉢	口縁部	(23.0)			にぶい橙色	砂粒含む	良	外面に指押さえ痕、内面にハケメ調整。	
184	F-3aトレンチ	2層	青磁	碗	底部				灰オリーブ色	緻密	良	高台付碗	貿易陶磁器 龍泉窯 12世紀中頃~13世
185	Fー3bトレンチ	2層	瓦質土器	甕	底部		12.0		暗オリーブ灰色	砂粒多く含む	良		紀前半 マメツが激しい
186	Fー3bトレンチ	2層	土師質土器	Ш	底部		(8.4)		橙色	砂粒少量含む、緻密	良		
187	F-3aトレンチ	2層	陶器	Ш	口縁部	(9.8)			灰黄色	緻密	良	灰釉皿	瀬戸
188	上の山	表採	須恵器	甕	体部				灰色	砂粒多く含む	良	外面に格子目叩き痕、内面に同心円文 叩き痕。	古墳時代 マメツが激しい
	F-13トレンチ	2層	備前焼	壺	口縁部	(15.0)			赤灰色	砂粒含む	堅致	口縁部は玉縁をなす	間壁編年備前Ⅲ期
			1		1.4.14		L						

遺物観察表

単位(cm)

													平匝.(CIII)
番号	出土場	i iie	種 別	器種		È	去量 (cm)	色 調	胎士	焼 成	形態・調整手法の特徴	備考
借亏	山工物	<i>i 1</i> 71	型 別	命俚		口径	底径	器高	巴爾	710L	7,7C //X,		開 与
190	F-13トレンチ	2層	備前焼	壺	口縁部				赤褐色	砂粒含む	良	外反して立ち上がり、端部は外側下方に 傾斜して垂れ下がり丸く玉縁をなす	間壁編年備前Ⅲ期
191	F-13トレンチ	2層	備前焼	すり鉢	口縁部			-	暗赤灰色	砂粒含む	堅致	口縁帯を形成。浅い凹線が2条ある。 内面に幅広くスリメを持つ	間壁編年備前V期
192	F-10トレンチ	3層	須恵質土器	鉢	底部		7.8		灰色	砂粒含む	良	底部は回転糸切り痕、内面にロクロ目残 る。	東播系?
193	C-2トレンチ	2層	須恵器	甕	体部				灰白色	砂粒少量含む、緻密	良	外面に平行タタキ痕	古墳時代
194	C一laトレンチ	ピット4	土師質土器	灯明皿	完形	4.6	2.3	1.7	にぶい黄橙色	砂粒少量含む	良	丁寧なナデ調整。内部に芯を置く台が ある	近世
195	Cーlaトレンチ	ピット4	土師質土器	小椀	完形	3.2	1.0	1.6	灰白色	緻密	良	丁寧なナデ調整。内面は淡緑色を呈する。小さな高台を持つ	近世 ミニチュア品 外面に炭化物が付 着す
196	13トレンチ	暗渠	須恵器	杯蓋	一部				灰白色	砂粒少量含む	良	扁平のつまみを持つ	古代 ほぼ全面が 黒く変色している
197	01トレンチ	3層	備前系須恵質土器	魙	口縁部				暗赤褐色	砂粒少量含む	堅致	外反した先端をやや丸みをもたせておさ める。端部はヨコナデ調整。頸部内面に ハケメが明瞭に残る。	間壁編年備前Ⅱ期
198	13トレンチ	暗渠	備前焼	壺	口縁部				灰色	砂粒少量含む	堅致	外反して立ち上がり、先端を玉縁状にお さめる。端部はヨコナデ調整。	間壁編年備前Ⅲ期 灰をかぶり、内面は 一部剥離している

土製品観察表

番号	出土場	l no	種 別	器種			法	量		色 調	胎土	焼成	備考
田力	ш 土 🦠	771	1里 加	607 作里		長さ(cm)	幅(cm)	穴径(cm)	重さ(g)	E 199	лг ⊥	17E 14K	VM. *3
C1	22トレンチ	3層	土製品	土錘	ほぼ完形	5.0	1.5	0.5	6	にぶい黄褐色	砂粒少量含む	良	外面に指押さえ痕
C2	B-6トレンチ	2層	土製品	土錘	ほぼ完形	4.5	1.1	0.4	5	灰色	砂粒少量含む	良	

金属器観察表

平位 (cm)								
番号	出土場所		種別			法量(cm)		形態の特徴
田石						直径	長さ	// / / / / / / / / / / / / / / / / / /
M1	C-1aトレンチ	ピット2	銅銭	寛永通寶	ほぼ完形	2.2		
M2	C-1aトレンチ	ピット2	銅銭	寛永通寶	1/2	(2.2)		
МЗ	C-1aトレンチ	ピット2	銅銭	寛永通寶	5/6	(2.2)		
M4	C-1aトレンチ	ピット2	銅銭	不明	ほぼ完形	2.4		ほかの銭が付着
M5	C一1aトレンチ	ピット1	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		3.5	断面が方形
M6	C-1aトレンチ	ピット2	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		3.5	頭部をほぼ直角に折り曲げている。 断面は長方形
M7	C-1aトレンチ	ピット2	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(3.5)	頭部をほぼ直角に折り曲げている。 断面は方形。先を欠損
M8	C-1aトレンチ	ピット2	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(3.5)	頭部がつぶれて「T」字形になる。断面は方形。 先を欠損
M9	C-1aトレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		4.5	頭部がつぶれて「T」字形になる。断面は方形。
M10	C-1aトレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(4.5)	頭部がつぶれて「T」字形になる。断面は方形。 先を欠損
M11	C-1aトレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(4.0)	頭部欠損。断面は方形
M12	C-1aトレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		5.0	頭部がつぶれて「T」字形になる。断面は方形。 先がほぼ直角に曲がる
M13	C-1aトレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(4.5)	頭部がつぶれて「T」字形になる。断面は方形。 先がほぼ直角に曲がる。先を欠損
M14	C-1aトレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		5.0	頭部がつぶれて「T」字形になる。断面は方形。 先が大きく内湾して曲がる。

図 版

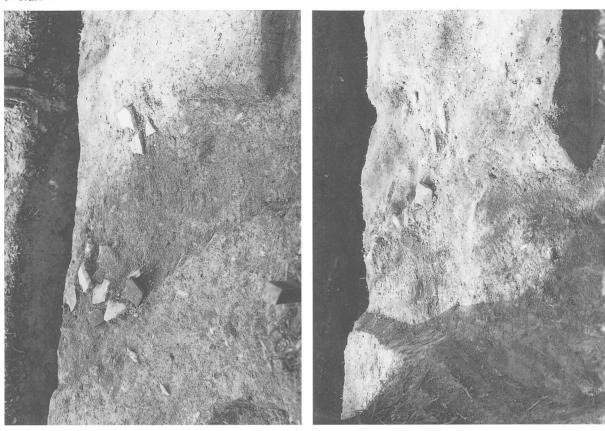


1. 瓦窯 (SO-1) (西より)



2. 瓦窯 (SO-1) (北西より)

図版 2



2. SK-2 (東より)



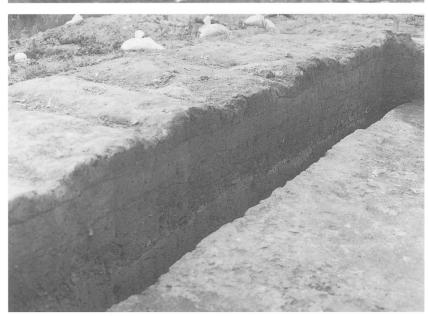
3. SK-3 (東より)



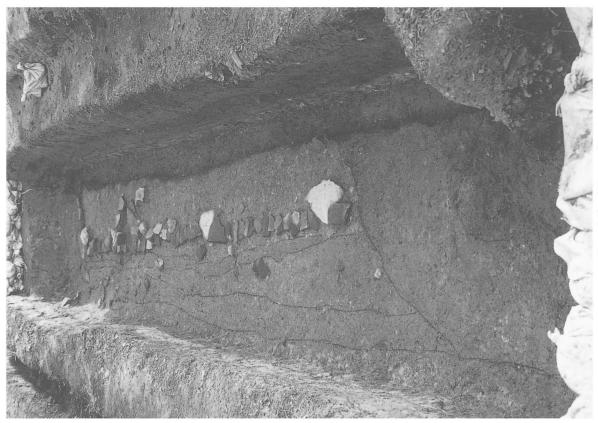
1. 瓦窯灰原 (05トレンチ) (南より)



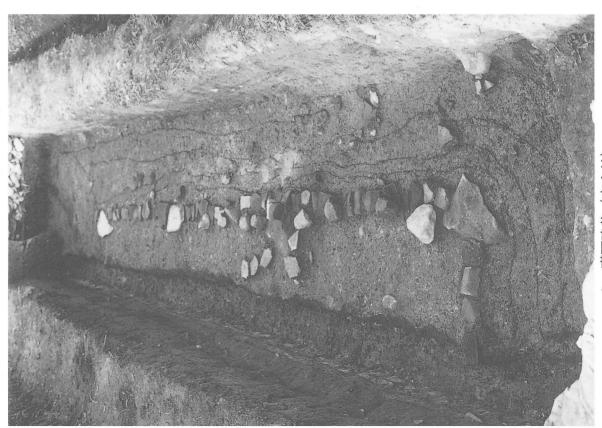
2. 瓦窯灰原 (05トレンチ) 瓦出土状況 (西より)



3.05トレンチ 西面土層断面 (南東より)



2. 礎石建物 (北より)



1. 礎石建物 (南より)



. 礎石建物検出トレンチ東面土層断面(北西より)



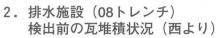
3. 礎石断ち割り状況 (東より)



4. 雨落ち溝断ち割り状況 (南より)



1. 排水施設(東より)







1. 排水施設検出08トレンチ 北面土層断面 (南より)



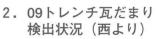
2. 排水施設検出08トレンチ 西面土層断面 (東より)



3. 排水施設検出08トレンチ 南面土層断面 (北より)



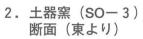
1. 07トレンチ瓦だまり 検出状況(北より)







1. 土器窯(SO-3) (北西より)





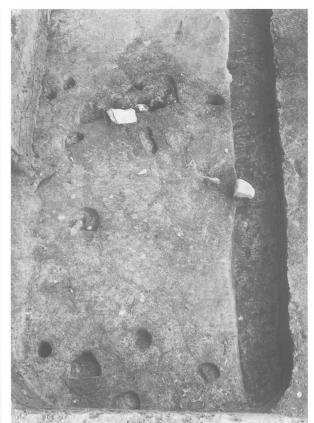




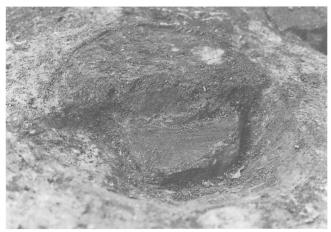
1. 土器窯 (SO-4) (北より)



1. 03トレンチ溝・ピット群 検出状況(東より)



2. 03トレンチ土壙・ピット群 検出状況(北より)



3. 03トレンチピット3



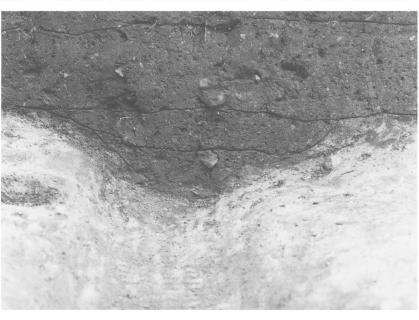
4. 03トレンチピット4



1. 04トレンチ溝・ピット群 検出状況(南より)



2. 04トレンチ溝断面 A-A'(北より)



3. 04トレンチ溝断面 B-B' (東より)





 03トレンチ瓦列断面 B-B'(南より)

 3.03トレンチ瓦列断面 C-C'(北より)



1. 03トレンチ瓦列 (北より)





 2.04トレンチ瓦列断面 C-C'(南より)

3. 04トレンチ瓦列断面 D-D'(北より)



1. 04トレンチ瓦列 (南より)



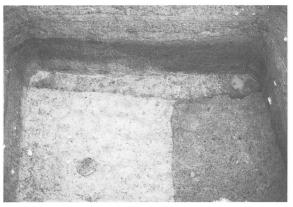
1. 15トレンチ検出状況(北より)



3. C-1aトレンチ検出状況(南より)



5. C-4トレンチ検出状況(南より)



2. 10トレンチ検出状況(北より)



4. C-1aトレンチピット2銭出土状況



6. F-2トレンチ瓦出土状況(北より)



7. F-3bトレンチ瓦出土状況(南より)



1. 磁気探査風景



2. 電気探査風景



3. レーダー探査風景



4. 発掘調査風景(1)



5. 発掘調査風景(2)



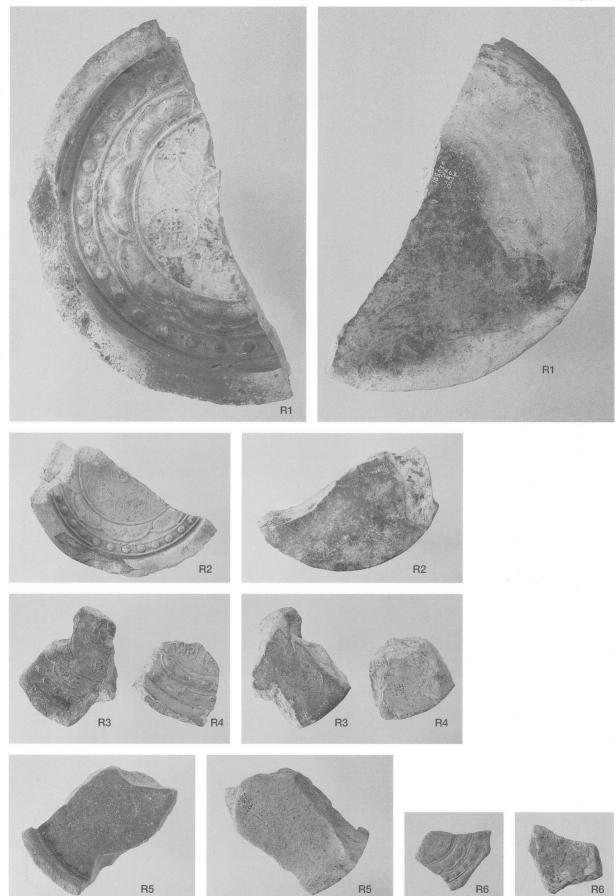
6. 現地指導風景



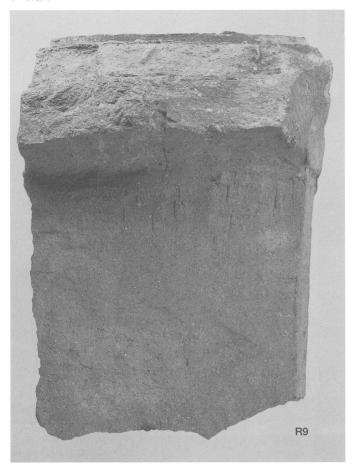
7. 現地説明会風景(1)

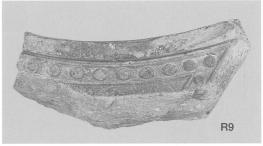


8. 現地説明会風景(2)



軒丸瓦



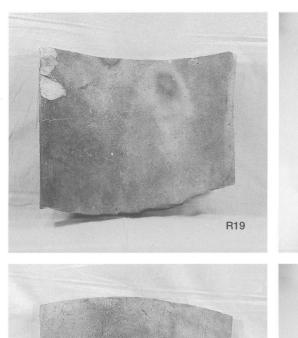


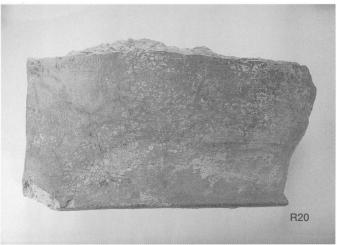
R8

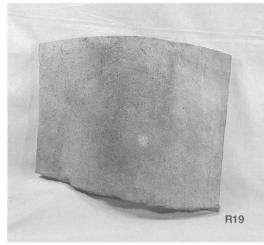


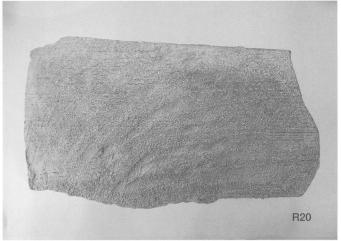
軒平瓦

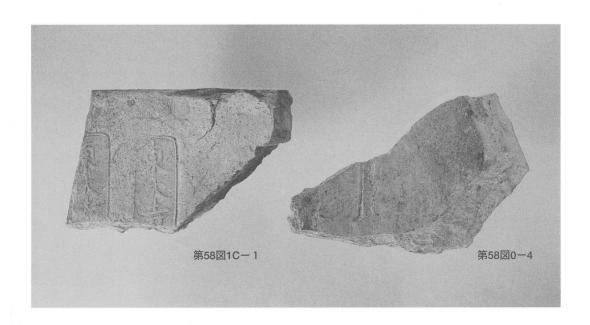
R7

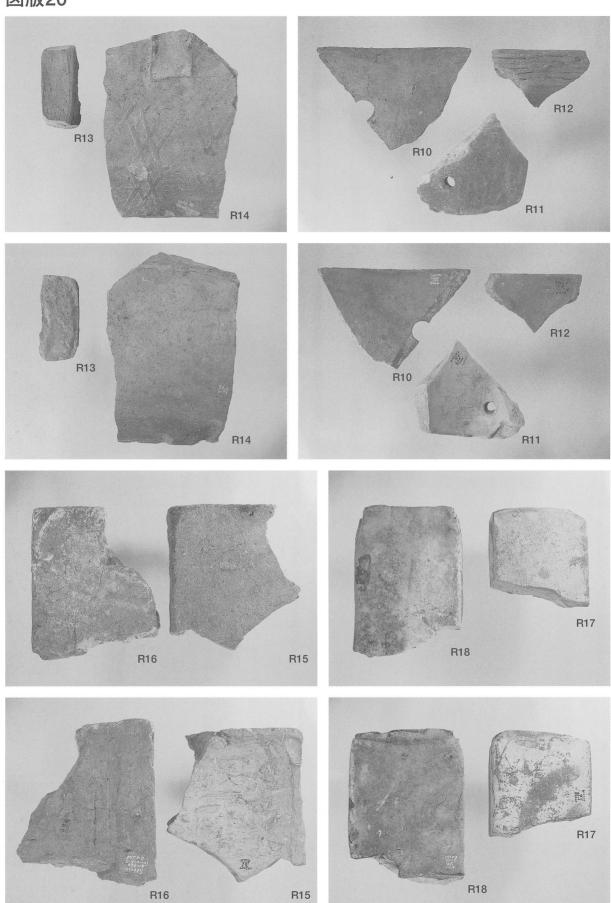




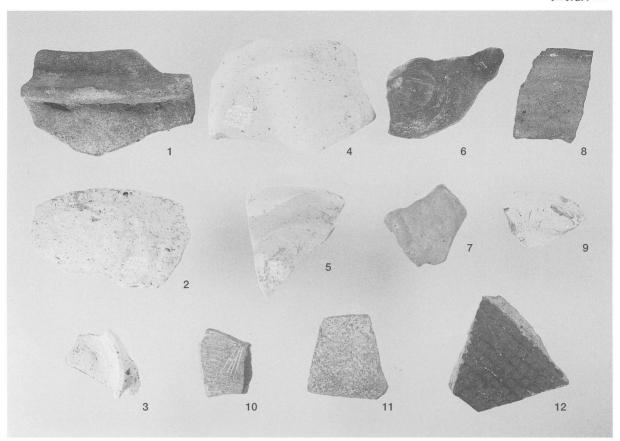




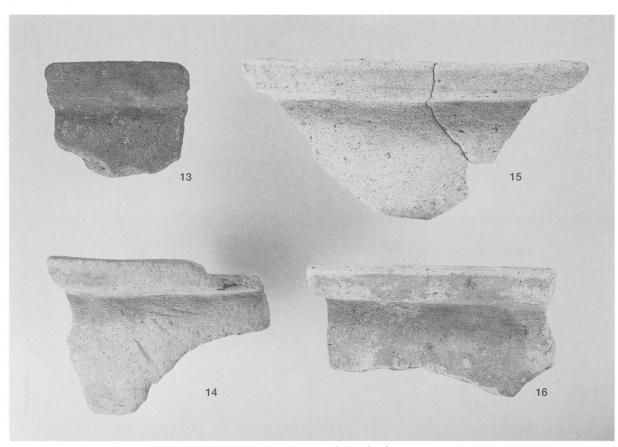




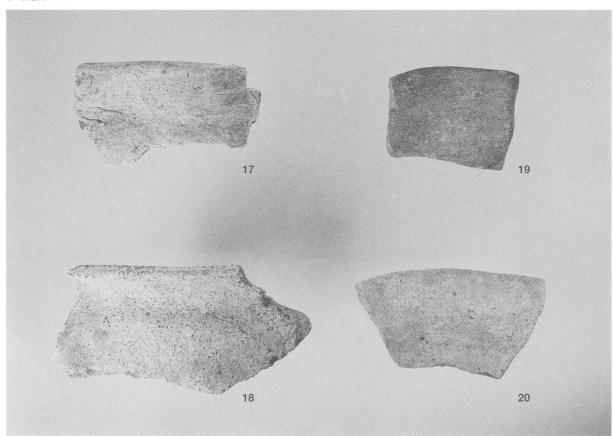
引掛け瓦・塼ほか



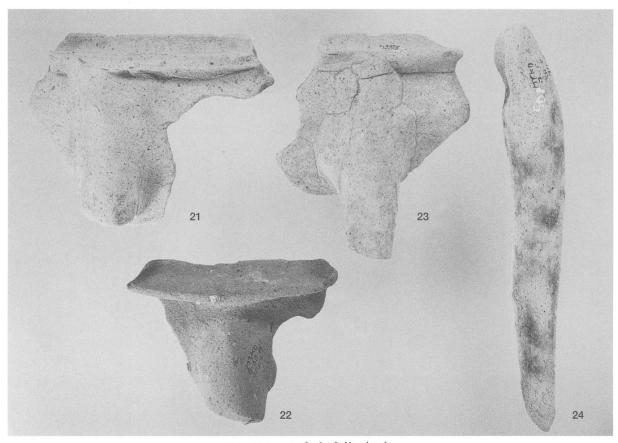
1. 瓦窯灰原(05トレンチ)出土遺物



2. SD-1出土遺物(1)



1. SD-1出土遺物(2)



2. SD-1出土遺物(3)